

下崎丸山遺跡  
下崎三反間遺跡

行橋市文化財調査報告書 第54集

2014

行橋市教育委員会

## 序

本書は、平成 15 年度に県営ほ場整備事業（入覚地区）の工事に先立ち実施しました、下崎丸山遺跡、下崎三反間遺跡の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する下崎地区は京都平野北西部の低台地上にあたり、近辺には、別所古墳や椿市廃寺など多くの遺跡が知られています。今回の調査では弥生時代の多様な遺構、遺物を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、福岡県行橋農林事務所、入覚土地改良区、福岡県教育委員会、地元鳥井原地区の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

平成 26 年 12 月

行橋市教育委員会  
教育長職務代理者  
教育部長 坪根 義光

## 例　　言

1. 本書は、福岡県行橋市大字下崎 452-1 ほかに所在する下崎丸山遺跡、同 481-1 に所在する下崎三反間遺跡の発掘調査報告書である。県営ほ場整備事業（入覚地区）の工事に伴い、国、県の補助を受け、平成 15 年度に発掘調査を実施した。
2. 調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。調査組織は第 1 章第 2 節に記す。
3. 遺構実測は伊藤昌広、今村美香、北本悦子、工藤祥子、田中すま子、谷口真子、津田容子、古木初子、本田久代が行った。
4. 遺構写真は伊藤が撮影した。空中写真撮影は株式会社東和航空技研に委託した。
5. 遺構図の整理は松本まゆみ、山口裕平が行った。
6. 遺物の接合・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。
7. 遺物の実測は定野美津子、松尾留衣、松本、山口が行った。また一部の作業を株式会社アーキジオに委託した。
8. 遺物写真は山口が撮影した。
9. 遺構・遺物図面の清書は鎌田尚子、松本が行った。
10. 本書に使用した遺構の略号は SI（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SP（柱穴）である。
11. 本書に使用した方位は、日本測地系（旧座標）による座標北である。
12. 報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。
13. 本書の執筆および編集は、松尾、松本の協力を得て山口が行った。

## 本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 下崎丸山遺跡	5
第4章 下崎三反間遺跡	45
第5章 結語	47

## 図版目次

巻頭図版 1	下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡遠景（東から）
巻頭図版 2	下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡全景（下が北）
図版 1	下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡の位置
図版 2	下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡遠景（南から）
図版 3	1. S1001（南から） 2. S1002（北から） 3. S1003（北から）
図版 4	1. S1003 土器出土状況 2. SB005（南から） 3. SB006（南から）
図版 5	1. SB007（北から） 2. SB008（西から） 3. SK010・011・012・013（北から）
図版 6	1. SK017（東から） 2. SK019（北から） 3. SK020（東から）
図版 7	1. SK024・025（北から） 2. SK026・027（西から） 3. SK027 半裁
図版 8	1. SK030（西から） 2. SK032（南から） 3. SK033（南東から）
図版 9	1. SK034（東から） 2. SK035（西から） 3. SK036（西から）
図版 10	1. SK037（東から） 2. SK041（南から）

- |        |                                                                                  |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------|
| 図 版 11 | 3. SK051・052 (南から)<br>1. SK053 (東から)<br>2. SD054 (北から)<br>3. SD055 ベルト A断面 (東から) |
| 図 版 12 | 1. SD055 ベルト B断面 (東から)<br>2. SD055 ベルト C断面 (東から)<br>3. SD055 ベルト D断面 (東から)       |
| 図 版 13 | 出土遺物 1                                                                           |
| 図 版 14 | 出土遺物 2                                                                           |
| 図 版 15 | 出土遺物 3                                                                           |
| 図 版 16 | 出土遺物 4                                                                           |
| 図 版 17 | 出土遺物 5                                                                           |
| 図 版 18 | 出土遺物 6                                                                           |
|        | 下崎三反間跡全景 (上が南)                                                                   |

## 挿図目次

- |        |                                  |
|--------|----------------------------------|
| 第 1 図  | 下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡調査区域 (1/8,000)     |
| 第 2 図  | 下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡の位置 (1/2,000,000)  |
| 第 3 図  | 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)          |
| 第 4 図  | 下崎丸山遺跡構造配置図 (1/300)              |
| 第 5 図  | SI001・SK038 実測図 (1/60)           |
| 第 6 図  | SI002 実測図 (1/60)                 |
| 第 7 図  | SI003 実測図 (1/60)                 |
| 第 8 図  | 出土土器実測図 1 (1/3)                  |
| 第 9 図  | SB004・SB005 実測図 (1/60)           |
| 第 10 図 | SB006・SB007 実測図 (1/60)           |
| 第 11 図 | 出土土器実測図 2 (1/3)                  |
| 第 12 図 | SB008 実測図 (1/60)                 |
| 第 13 図 | SK009・010・011・012 実測図 (1/60)     |
| 第 14 図 | 出土土器実測図 3 (1/3)                  |
| 第 15 図 | SK013・014・015 実測図 (1/60)         |
| 第 16 図 | SK016 実測図 (1/60)                 |
| 第 17 図 | SK017・018 実測図 (1/60)             |
| 第 18 図 | SK019・020・021・022・023 実測図 (1/60) |
| 第 19 図 | 出土土器実測図 4 (1/3)                  |
| 第 20 図 | SK024・025 実測図 (1/60)             |
| 第 21 図 | SK026・027・028・029 実測図 (1/60)     |
| 第 22 図 | SK030・031・032・033・034 実測図 (1/60) |
| 第 23 図 | 出土土器実測図 5 (1/3)                  |
| 第 24 図 | 出土土器実測図 6 (1/3)                  |

第 25 図	SK035・036・037 実測図 (1/60)
第 26 図	出土土器実測図 7 (1/3)
第 27 図	出土土器実測図 8 (1/3)
第 28 図	SK039・040 実測図 (1/60)
第 29 図	出土土器実測図 9 (1/3)
第 30 図	SK041・042 実測図 (1/60)
第 31 図	出土土器実測図 10 (1/3)
第 32 図	SK043・044・045 実測図 (1/60)
第 33 図	出土土製品実測図 (2/3)
第 34 図	SK046 実測図 (1/60)
第 35 図	SK047・048 実測図 (1/60)
第 36 図	SK049・050 実測図 (1/60)
第 37 図	出土土器実測図 11 (1/3)
第 38 図	SK051・052 実測図 (1/60)
第 39 図	出土土器実測図 12 (1/3)
第 40 図	SK053 実測図 (1/60)
第 41 図	出土土器実測図 13 (1/3)
第 42 図	SD055 断面図 (1/60)
第 43 図	出土土器実測図 14 (1/3)
第 44 図	出土石器実測図 1 (2/3)
第 45 図	出土石器実測図 2 (2/3)
第 46 図	出土石器実測図 3 (2/3)
第 47 図	出土石器実測図 4 (2/3)
第 48 図	出土石器実測図 5 (2/3)
第 49 図	出土石器実測図 6 (2/3)
第 50 図	出土管玉実測図 (1/1)
第 51 図	発掘調査の様子
第 52 図	下崎三反間遺跡遺構配置図 (1/300)

## 表 目 次

表 1	出土遺物観察表 1
表 2	出土遺物観察表 2
表 3	出土遺物観察表 3
表 4	出土遺物観察表 4

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯と経過

今回報告する下崎丸山遺跡、下崎三反間遺跡は、県営ほ場整備事業入覚地区的工事に先立つ埋蔵文化財確認調査で発見された遺跡である。同事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成6・8・9・11・12年度の5ヶ年にかけて断続的に行われてきた。平成14年度には大字下崎における新たな事業計画が発生したことから、行橋市教育委員会では10月26日、28日の両日に試掘調査を行った。その結果、事業区域内の最高所、標高25m前後にかけて高密度に展開する遺構群を確認した。その広がりは北側に道を隔てたやや低い地点にも存在すると想定されたため、小字名より前者を下崎丸山遺跡（遺跡番号14125010）、後者を下崎三反間遺跡（同14125009）と名付けた。このことより事業主体である福岡県行橋農林事務所及び入覚土地改良区と協議を行い、翌年度工事で削平される部分を対象に記録保存のための発掘調査を実施する運びとなった。調査面積は下崎丸山遺跡が2,980m<sup>2</sup>、下崎三反間遺跡が850m<sup>2</sup>である。

発掘調査は平成15年10月12日より開始した。まず重機で遺構の検出を行い、11月5日からは人力による掘り下げを始めた。12月には調査区内に10mのグリッドを設定し、縮尺100分の1で平板図（遺構配置図）の作成を開始した。併せて縮尺20分の1で遺構の実測も行っていった。遺構の写真撮影は35mm白黒フィルム、35mmカラーリバーサルフィルムを使用し調査の進展に従い順次行った。調査は年をまたぎ、遺構を完掘し終えた平成16年1月28日に空中写真撮影を行った。その後に補足調査を行い、2月16日に現地における発掘調査を終了した。

遺物の復元や実測、遺構図の製図などの整理作業は、調査担当者の伊藤昌広の下で平成16年度より断続的に行われてきた。平成24年度にはそれを本格化させ調査報告書を刊行する準備を進めてきたが、年度途中で伊藤が急逝したため同年度内の刊行は止むを得ず見直すことになった。その後、これらの作業を山口裕平が引き継ぐこととなり、平成26年度に改めて整理作業を行い本書を刊行する運びとなった。調査体制は次節に示す通りである。

## 第2節 調査体制

### 現地調査（平成15年度）

総括	行橋市教育委員会	教育長	徳永文悟
		教育部長	光畠浩治
調査		教育部 文化課長	奥廣俊
		教育部 文化課 文化財保護係長	小川秀樹
		教育部 文化課 文化財保護係	伊藤昌広（調査担当）
		教育部 文化課 文化財保護係	中原博
庶務		教育部 文化課 文化振興係長	宮崎森義
		教育部 文化課 文化振興係	上原圭三

### 発掘調査作業員

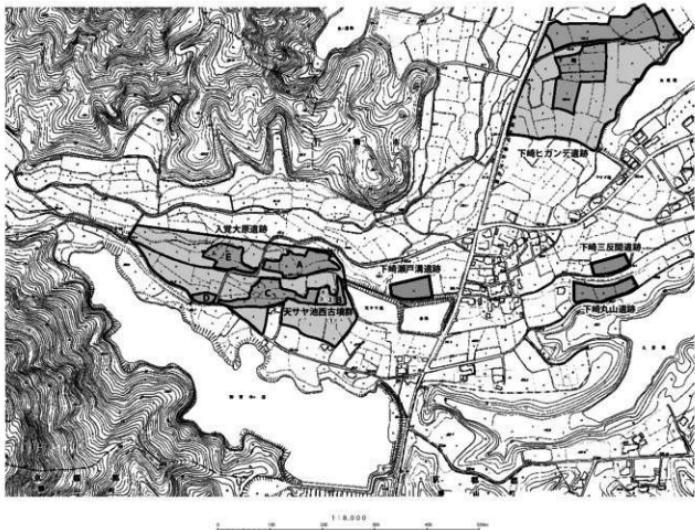
赤波江静代 生永勝美 池田保 猪ノ鼻範夫 今村美香 浦田秋子 小野田トミエ  
柏木正 角田義彦 上家エイ子 北本悦子 木下アヤ子 工藤祥子 小島義弘  
佐藤愛子 島木邦子 鷲田チヅ子 島田弘 志水ゆき子 末永修崇 角屋佐多雄  
角屋久子 田中すま子 谷口貞子 津田容子 中島裕子 中野文江 長部照治  
長部フサ子 古木初子 本田久代 吉原トヨ子 吉松勇

報告書作成（平成 26 年度）

総 括	行橋市教育委員会 教育長	山田 英俊（～10月8日）
	教育部長	灰田 利明（～9月30日）
	教育副長	坪根 義光（10月1日～）
調 査	教育部 文化課長	小川 秀樹（～9月30日）
	教育部 文化課長	亀田 秀雄（10月1日～）
	教育部 文化課 参事兼文化財保護係長	小川 秀樹（10月1日～）
	教育部 文化課 文化財保護係長	辛鶴千恵子（～9月30日）
	教育部 文化課 文化財保護係	中原 博
	教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平（報告書担当）
庶 務	教育部 文化課 文化振興係長	高尾信次郎
	教育部 文化課 文化振興係	森 雅代
	教育部 文化課 文化振興係	入生 佳奈
	教育部 文化課 文化振興係	田坂 彩

整理作業員

枝吉恵美 奥野康代 鎌田尚子 佐々木豊子 定野美津子 松尾留衣 松本まゆみ



第1図 下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡調査区域（1/8,000）

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に所在する（第2図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口72,882人（平成26年8月末日現在）を擁す。市域は京都平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に觀音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、観山〔121.7m〕など少數の独立山塊がある。市内には霧峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川・長崎川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

本書で報告する下崎丸山遺跡、下崎三反間遺跡は平尾台の南東の中位段丘、標高25m前後に所在する。

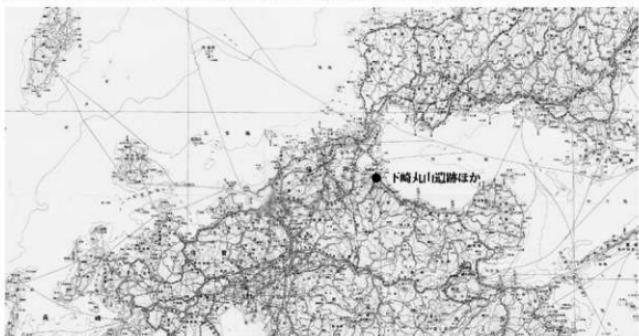
### 第2節 歴史的環境

京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築紫遺跡C区で該期の石器および礫群が見つかっている。

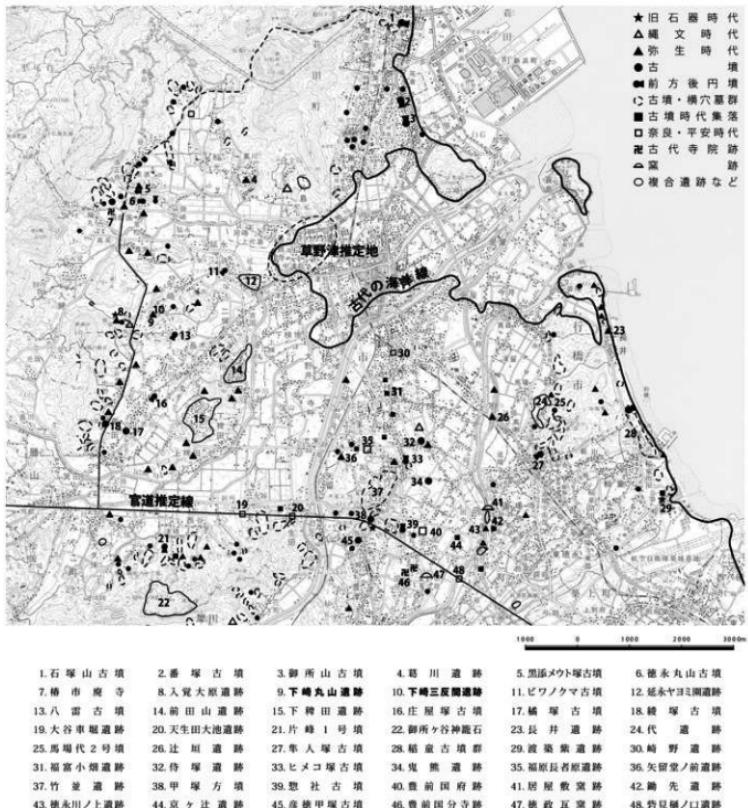
続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約4800年前頃で、現在の延永一津熊一大橋—今井一津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、養島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第3図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、草期の押型文土器（竹並遺跡など）、後期の西式平底土器（下崎瀬戸溝遺跡）など各期の遺物が徐々に知られるようになってきた。

2500年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。本書で報告する2遺跡も弥生時代に営まれた遺跡である。

3世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町



第2図 下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡の位置 (1/2,000,000)



第3図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。7世紀になると全国的に古墳築造も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になつても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市庵寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津積に古代山城である御所ヶ谷神龍石が築かれた。泉地区に所在する福原長者原遺跡は東西幅150 mの区域をもつ8世紀前半の官衙遺跡で、奈良時代における豊前国府の可能性が指摘されている。

## 第3章 下崎丸山遺跡

下崎丸山遺跡は、行橋市大字下崎 452-1、458-1 番地に所在する。標高 24 ~ 25m 前後の中位段丘に立地する。調査面積は約 2,980m<sup>2</sup>である。

調査の結果、弥生時代前中期から中期の遺跡を検出した（第4図、図版2）。遺構には竪穴建物3軒をはじめとして、掘立柱建物5棟、土坑や溝、多数の柱穴などがあり、遺物には弥生土器、土鍤、石鎌、石斧、石庖丁などがある。遺構検出面（地山）は黄褐色あるいは赤褐色を呈する風化火山灰層である。基本層序は、調査地が棚田状に開削されていたこともあり、地山の残存状況も各所で異なるため、提示することは適わなかった。

### （1）竪穴建物

#### SI001（第5図、図版3）

調査区北側のやや西寄りで確認した。南壁と西壁の一部が残存し、北側から東側にかけて大きく削平を受けているものと考えられる。検出できた範囲で南壁長 5.05m、西壁長 2.75 m を測り、直角に折れるコーナーを持つことから、竪穴建物の平面プランは方形または長方形になるものと判断できる。床面上では複数の柱穴を検出したが、どれが主柱穴になるかは分からなかった。また検出できたのは一部ではあるが、壁際には幅 20 ~ 25cm、深さ 10cm の壁溝がめぐる。出土遺物は無かった。

#### SI002（第6図、図版3）

調査区のほぼ中央で検出した。全体が削平を受けていると考えられ、竪穴建物の壁の立ち上がりは残っていないかったが、主柱穴と思われる 6 つの柱穴を検出した。柱穴は現状で直径 40cm 前後、深さ 50cm 程を測り、一辺 1.3 ~ 1.8m の六角形状に配されることから、竪穴建物の平面プランは方形を呈していたと思われる。中央にある長辺 95cm、短辺 70cm、深さ 15cm 程の長方形土坑は焼跡の可能性がある。出土遺物は無かった。

#### SI003（第7・8図、図版3・4・13）

調査区南側のやや東寄りで検出した。やはり全体が削平を受けていると考えられ、建物の壁の立ち上がりは残っていない。南側が調査区外へと続いている、検出できた範囲で主柱穴と思われる 5 つの柱穴を検出した。柱穴は現状で 30cm 前後、深さ 20 ~ 50cm を測り、一辺 1.2 ~ 2.2 m の多角形状に配されている。竪穴建物の平面プランは SI002 と同様の円形になると思われる。中央には直径 60cm、深さ 20cm の円形土坑があり、そこから弥生土器の片断が出土した。

弥生土器 1 は壺。胸部中位から底部にかけての破片である。

### （2）掘立柱建物

#### SB004（第9図）

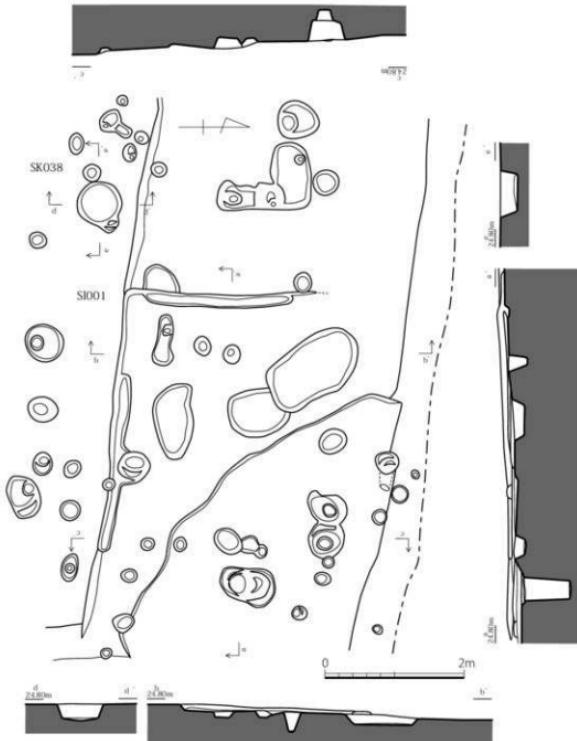
調査区南側の西寄りで検出した。1間×1間の掘立柱建物である。西側の柱列では方位を N-8°-E にとる。柱間は東側で 2.65m、西側で 2.5m、南側で 2.6m、北側で 3.1m を測り、東西に若干長い形状となる。柱穴は直径 30 ~ 50cm、深さ 30 ~ 40cm を測り、北側の 2 つでは掘り直しが行われている。出土遺物は無かった。

#### SB005（第9図、図版4）

調査区の中央で検出した。1間×1間の掘立柱建物である。西側の柱列では方位を N-13°-E にとる。柱間は東側で 2.65m、西側で 2.65m、南側で 3.7m、北側で 3.5m を測り、東西に長い形状となる。柱穴



第4図 下崎丸山遺跡遺構配置図 (1/300)



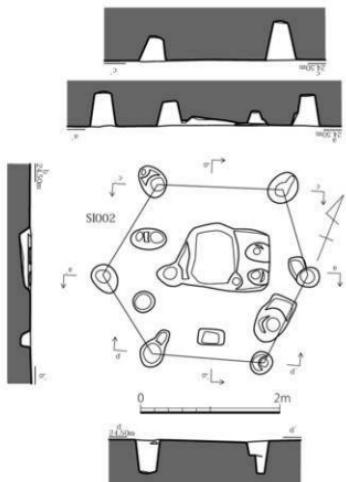
第5図 SI001・SK038 実測図 (1/60)

は直径 40 ~ 50cm、深さ 20 ~ 35cm を測る。出土遺物は無かった。

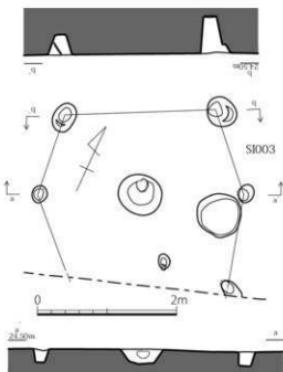
**SB006** (第 10・11・44 図、図版 4・13・16)

調査区の中央で検出した。1間×2間の掘立柱建物である。西側の柱列では方位を N-7°-E にとる。桁行は南側で 2.55m、北側で 2.6m を測る。梁行は東側で 2.7m、西側で 2.85m で、柱間は東側で 1.2 ~ 1.5m、西側で 1.2 ~ 1.65m を測る。正方形に近い平面プランとなる。柱穴は直径 40 ~ 60cm、深さ 10 ~ 35cm を測り、南西隅の柱穴では掘り直しが行われている。出土遺物に弥生土器の甕、高杯と打製石器があるが、どの柱穴より出土したかは不明である。

弥生土器 2・3 は甕。いずれも底部片である。4 は高杯。脚部上半の破片で、杯部との境に低い突帯を 1 条めぐらす。



第6図 SI002 実測図 (1/60)



第7図 SI003 実測図 (1/60)

石器 71 は打製石鏃。凹基式。先端を欠く。  
姫島産黒曜石製。

#### SB007 (第10図、図版5)

調査区中央のやや西寄りで検出した。1間×1間の掘立柱建物である。西側ないし東側の柱列では方位をN-7°-Eとする。柱間は東側と西側で2.75m、南側と北側で3.6mを測り、東西に長い整った長方形プランとなる。柱穴は直径30～40cm、深さ10～30cmを測る。出土遺物は無かった。

#### SB008 (第12図、図版5)

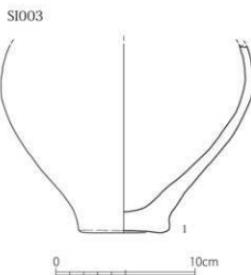
調査区東端で検出した。建物はさらに東側の調査区外へと広がり、検出できた範囲で2間×1間以上となる。西の柱列では方位をN-24°-Eとする。西側の桁行は3.4m、柱間は1.7mを測る。梁行の長さは1.9m以上となる。柱穴は直径30～50cm、深さ20～35cmを測る。出土遺物は無かった。

#### (3) 土坑

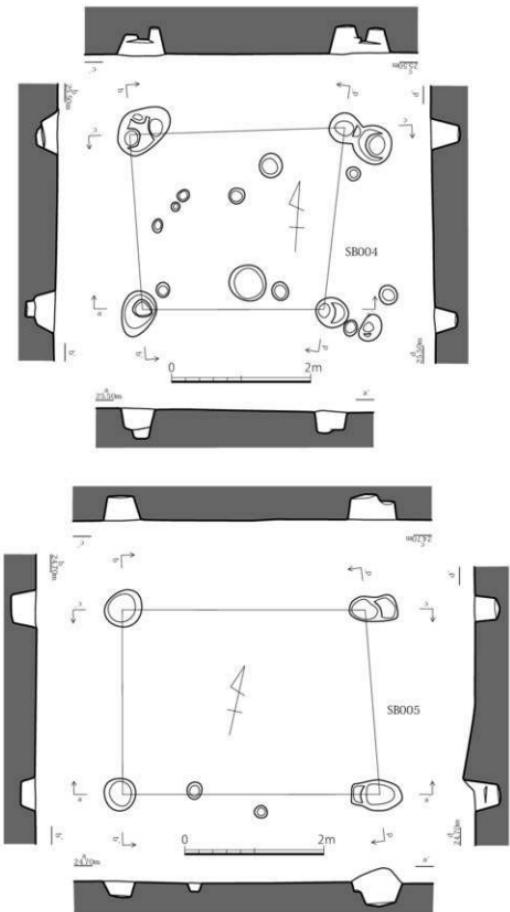
調査区では複数の土坑を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に、主要なものだけを報告する。

#### SK009 (第13図)

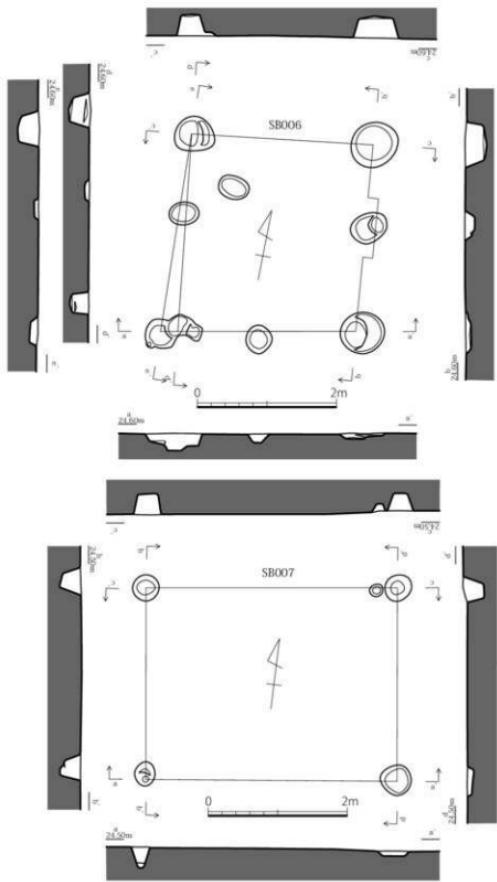
調査区西側で検出した。不整円形を呈し、長軸220cm、短軸165cm、深さ15cmを測る。弥生



第8図 出出土器実測図1 (1/3)



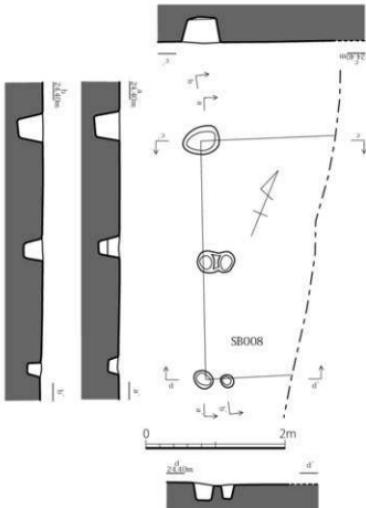
第9図 SB004・SB005実測図 (1/60)



第10図 SB006・SB007 実測図 (1/60)



第11図 出土土器実測図 2 (1/3)



第12図 SB008実測図(1/60)

器片と砥石が出土した。

石器 72は砥石。小片で2面の砥面を残す。砂岩製。

#### SK013(第15図、図版5)

調査区西側で検出した。SK012に接する。不整円形を呈し、長軸160cm、短軸145cm、深さ15cmを測る。弥生土器の甕、壺、高环が出土したが、小片のため図示できなかった。

#### SK014(第14・15図、図版13)

調査区西側で検出した。SK015に接する。円形を呈し、直径160cm程、深さ20cmを測る。弥生土器の甕、壺、鉢が少量出土し、そのうち甕、鉢を図示した。

弥生土器 7は甕の口縁部。復元口径20.3cmを測る。8は鉢。口縁部から底部にかけての破片。復元口径27.4cmを測る。

#### SK015(第15図)

調査区西側で検出した。SK014に接する。不整円形を呈し、長軸145cm、短軸125cm、深さ20cmを測る。出土遺物は無かった。

#### SK016(第16・44図、図版16)

調査区西側で検出した。2つのピットと切り合う。円形土坑で直径115cm、深さ5cmを測る。弥生土器の小片と環状石斧が出土した。

石器 73は環状石斧の小片。凝灰質頁岩製。

土器の甕、高环が少量出土したが、小片のため図示できなかった。

#### SK010(第13図、図版5)

調査区西側で検出した。SK011に接する。大型で楕円形を呈し、長軸380cm、短軸200cm、深さ15cmを測る。弥生土器の甕、壺が出土したが、小片のため図示できなかった。

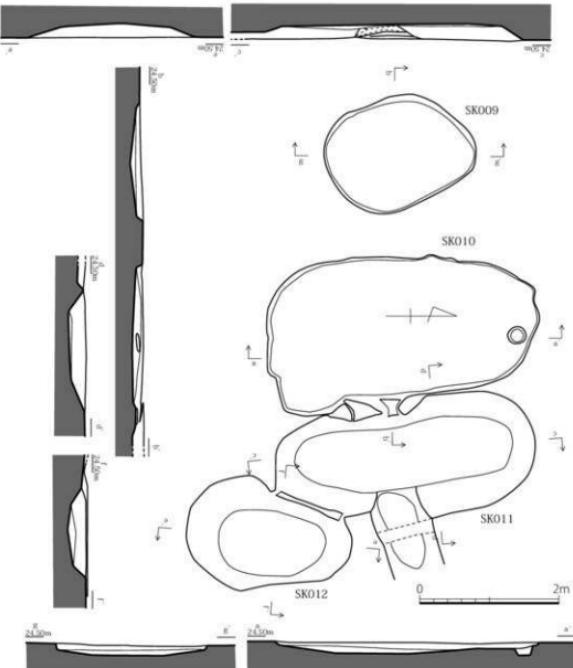
#### SK011(第13・14図、図版5・13)

調査区西側で検出した。SK010、SK012と接する。大型で楕円形を呈し、長軸370cm、短軸170cm、深さ25cmを測る。弥生土器の甕、壺、器台が出土した。甕は小片のため図示できなかった。

弥生土器 5は壺の口縁部片。喇叭状に大きく開く形状で、頸部上位に4条の沈線をめぐらす。復元口径34.7cmを測る。6は一段の透かしをもつ小型の器台。復元口径16.4cm、高さ8.3cmを測る。

#### SK012(第13・44図、図版5・16)

調査区西側で検出した。SK011、SK013に接する。歪な楕円形を呈し、長軸240cm、短軸165cm、深さ25cmを測る。少量の弥生土



第13図 SK09・010・011・012実測図(1/60)

**SK07 (第14・17・44図、図版6・13・16)**

調査区西側で検出した。円形を呈し、同形の土坑と切り合う。直径70cm、深さ65cmを測る。弥生土器の甕、壺の小片と石庖丁が出土した。

弥生土器 9は甕。口縁部から脛部上半にかけての破片で、復元口径34.8cmを測る。口縁直下に三角突帯を1条めぐらす。

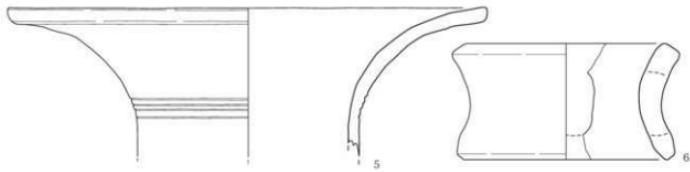
石器 74は石庖丁。全体の3分の2程度が残る。赤紫色泥岩製。

**SK08 (第14・17図、図版13)**

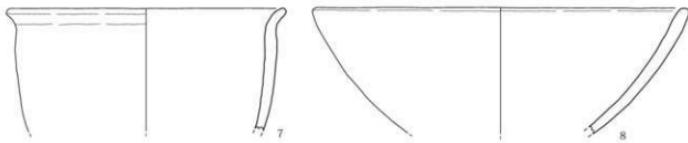
調査区西側で検出した。歪な楕円形を呈し、長軸190cm、短軸165cm、深さ10cmを測る。弥生土器の甕、壺が出土したが、壺は小片のため図示できなかった。

弥生土器 10は甕の口縁部片。やや内傾する直口縁を呈し、その上位に刻目をもつ三角突帯を1条めぐらす。

SK011



SK014



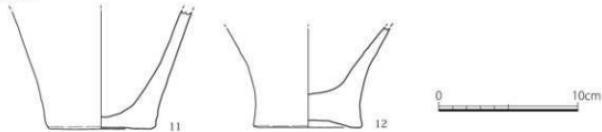
SK017



SK018



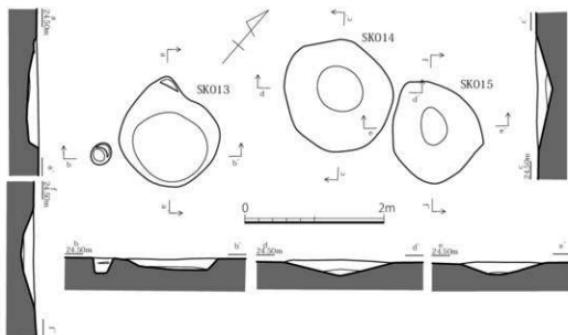
SK019



第14図 出土土器実測図3 (1/3)

SK019 (第14・18図、図版6・13)

調査区北側の西寄りで検出した。北側が削られ楕円形を呈しており、長軸 150cm、短軸 115cm、深さ



第15図 SK013・014・015実測図 (1/60)

30cmを測る。弥生土器片が出土した。

弥生土器 11・12は甕。底部の小片である。

#### SK020 (第18・19図、図版6・13)

調査区北側の西寄りで検出した。円形を呈し、直径60cm、深さ35cm程を測る。弥生土器の甕が出土した。

弥生土器 13・14は甕。13は全体の5分の2程度を残す破片だが完形に復元でき、復元口径22.6cm、底径6.0cm、器高23.0cmを測る。口縁部は短くハの字状に外反する。胴部は砲弾形を呈し、口縁直下が胴部最大径となる。14は口縁部から胴部上半部にかけての破片。13と形状を同じくし、復元口径28.0cmを測る。胴部の最上位に3条の沈線をめぐらす。

#### SK021 (第18図)

調査区北側の西寄りで検出した。SK022と接する。不整形な楕円形を呈し、長軸190cm、短軸100cm、深さ15cmを測る。弥生土器の甕、高环が少量出土したが、小片のため図示できなかった。

#### SK022 (第18図)

調査区北側の西寄りで検出した。SK021、SK023と接する。楕円形を呈し、長軸240cm、短軸90cm、深さ25cmを測る。弥生土器の甕が少量出土したが、小片のため図示できなかった。

#### SK023 (第18図)

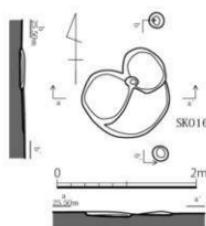
調査区北側の西寄りで検出した。SK022と接する。歪んだ帯状を呈し、長さ335cm、幅120cm、深さ20cmを測る。弥生土器の甕が少量出土したが、小片のため図示できなかった。

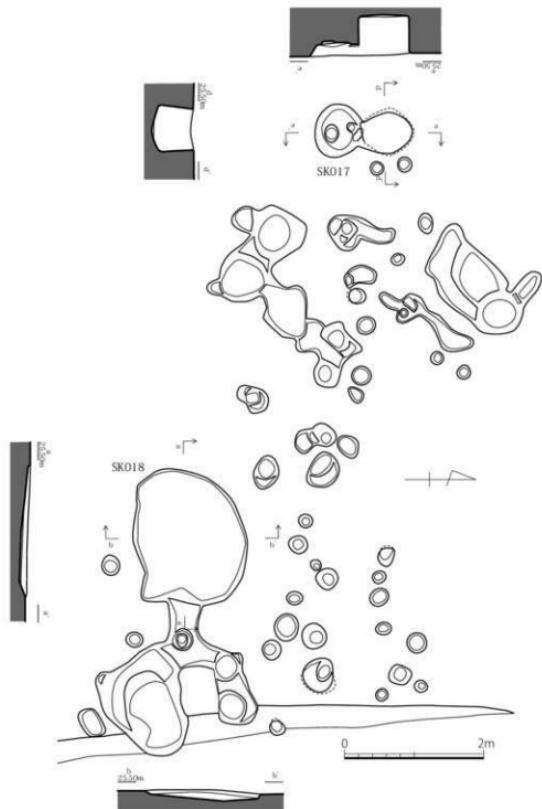
#### SK024 (第19・20・44図、図版7・13・16)

調査区北側のやや西寄りで検出した。SK025と接する。大型の土坑で、長軸700cm、短軸220cm、深さ60cmを測る。弥生土器の甕、壺、器台などが比較的まとまって出土したが、小片のため図示できたのは甕の底部と器台のみに留まった。また少量の石器も出土した。

弥生土器 15は甕。底部の小片である。16は器台。復元口径

第16図 SK016実測図 (1/60)



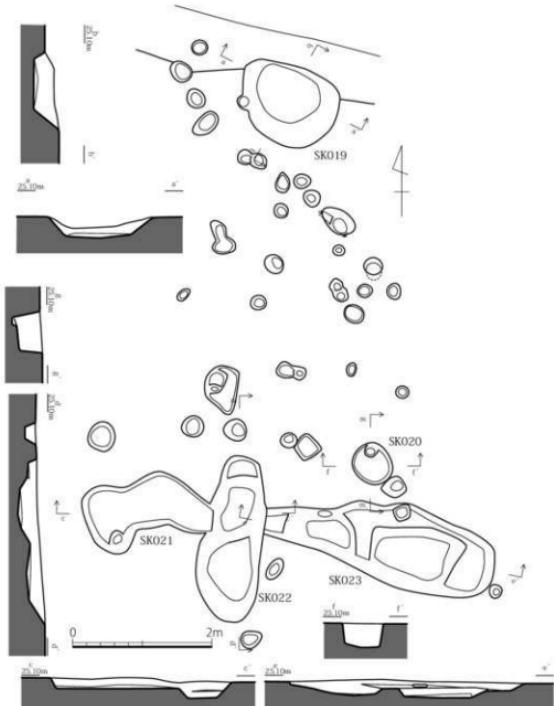


第17図 SK017・018 実測図 (1/60)

8.2cm、器高 12.7cm を測る。

石器 75は打製石鏃。平基式。先端を欠くがほぼ完形である。残存長 3.0cm、厚さ 0.4cm を測る。安山岩製。76は磨製石斧。刃部の小片で、表面は風化しており凹凸が激しい。安山岩質凝灰岩製。77は石庖丁。全体の2分の1程度の破片である。石材は赤紫色泥岩を用いる。78は砥石。小片で3面の砥面を残す。砂岩製。

SK025 (第20図、図版7)



第18図 SK019・020・021・022・023 実測図 (1/60)

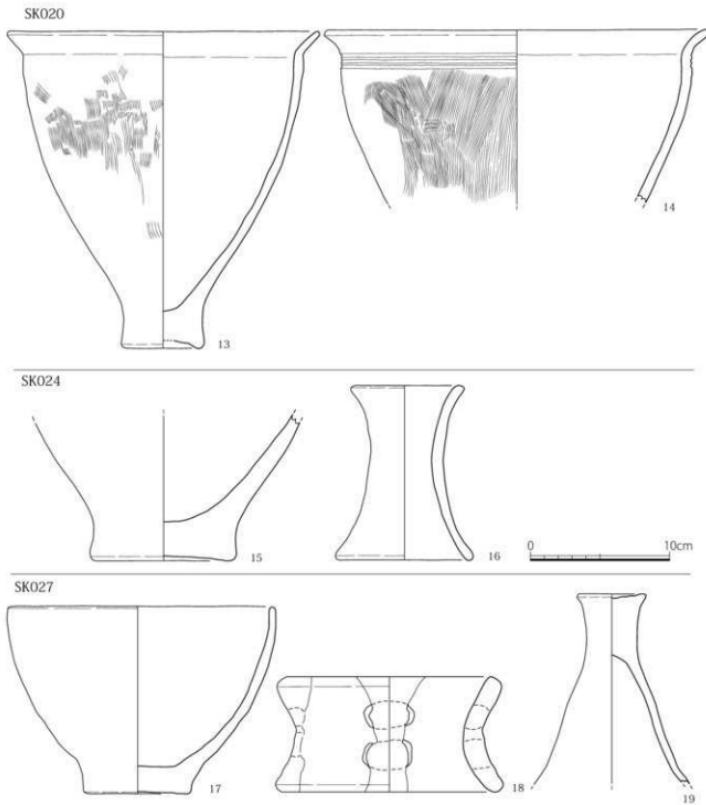
調査区北側のやや西寄りで検出した。SK024と接する。やや歪んだ方形状を呈し、一辺140cm程度、深さ10cmを測る。弥生土器の甕、壺、高环と粘土塊が出土したが、いずれも小片のため図示できなかった。  
SK026(第21図、図版7)

調査区南側のやや西寄りに位置する。SK027に接する。楕円形を呈し、長軸205cm、短軸180cm、深さ30cmを測る。弥生土器の甕、壺、高环が出土したが、小片のため図示できなかった。

#### SK027(第19・21・45図、図版7・13・16)

調査区南側のやや西寄りで検出した。SK026と接する。円形を呈し、直径215cm、深さ35cmを測る。弥生土器の甕、壺、鉢、器台、蓋などや打製石斧が出土した。

**弥生土器** 17は鉢。全体の2分の1程度の破片である。復元口径19.45cm、器高13.6cm。18は器台。小型で二段の透かしをもつ。復元口径16.2cm、高さ8.3cmを測る。19は蓋か。器高に比して細身のつ



第19図 出土土器実測図4 (1/3)

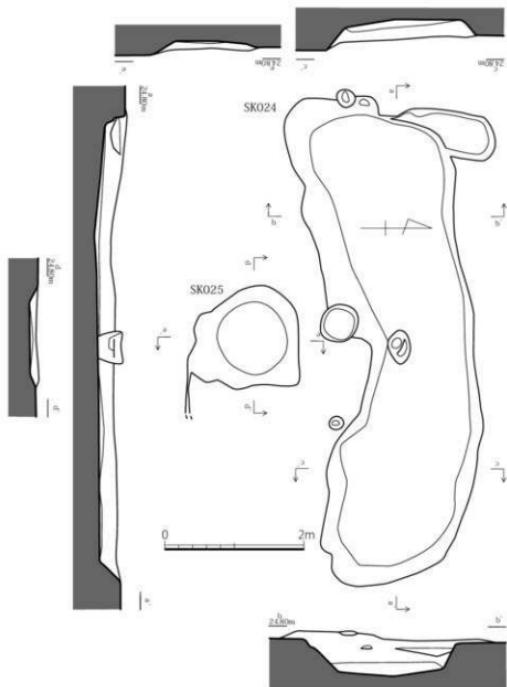
くりである。

石器 79は扁平打製石斧。完形で全長12.5cm、幅5.7cm、厚さ1.7cmを測る。泥岩製。80は磨製石鎌の未製品か。頁岩製。

#### SK028 (第21図)

調査区南側のやや西寄りに位置する。橢円形を呈し、長軸205cm、短軸130cm、深さ10cmを測る。弥生土器の甕、壺が少量出土したが、小片のため図示できなかった。

#### SK029 (第21図)



第20図 SK024・025実測図(1/60)

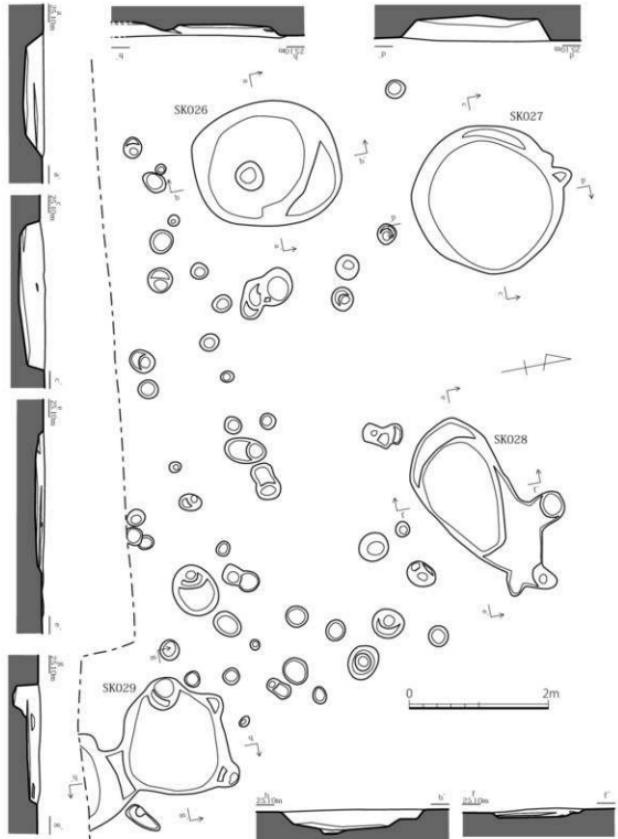
調査区南側のやや西寄りで検出した。平面プランは方形を基調とする。一边150cm程、深さ15cmを測る。弥生土器の甕、壺、高环、器台が出土したが、小片のため図示できなかった。

**SK030** (第22・23・45図、図版8・13・14・16)

調査区中央のやや西寄りで検出した。SK031、SK032に接する。大型の楕円形を呈し、長軸330cm、短軸250cm、深さ50cmを測る。比較的まとまった量の弥生土器が出土した。器種には甕、壺、高环がある。また石庖丁、砥石などの石器が少量出土した。

**弥生土器** 20～24は甕。20・21は口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部はくの字形をなし、20は胴部上半に3条の沈線をめぐらす。20は復元口径38.2cm、21は復元口径37.2cmを測る。22～24は胴部下半から底部にかけての破片である。25は壺。頸部の破片で、残存部の上位に2条の沈線をめぐらす。26は高环。环部下半から脚部にかけての破片である。脚部は細くて短い、器台の可能性もある。

**石器** 81は小型の扁平石斧か。磨製の石庖丁を転用したと考えられ、研磨により刃部をつくりだして

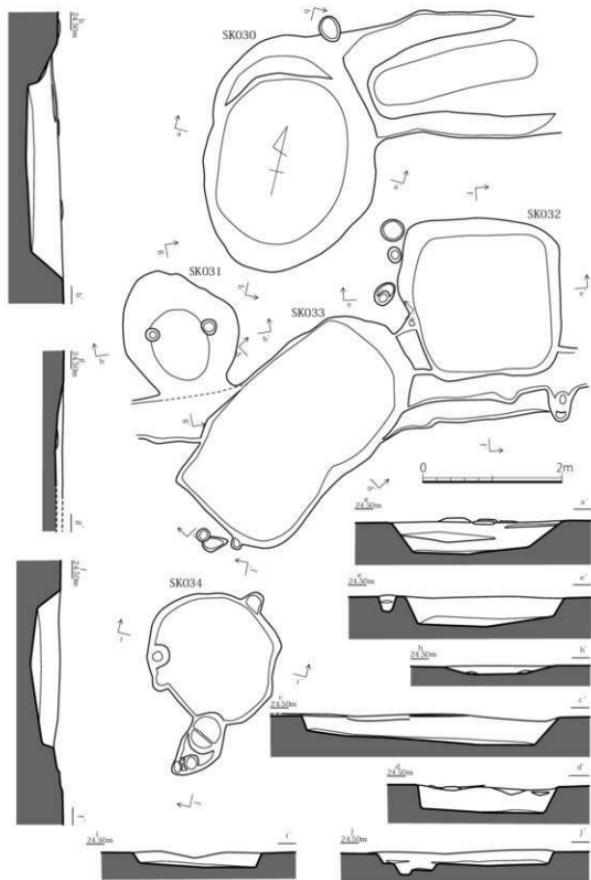


第21図 SK026・027・028・029 実測図 (1/60)

いる。灰色凝灰岩製。82は石窓。全体の3分の1程度を残す。頁岩製。83は砥石の破片。底面は5面で、1面は自然の面となる。石材は砂岩を用いる。

#### SK031 (第22・46図、図版17)

調査区中央のやや西寄りで検出した。SK030、SK033と接する。楕円形を呈し、長軸185cm、短軸165cm、深さ10cmを測る。弥生土器の甕、壺が少量出土したが、小片のため図示できなかった。また



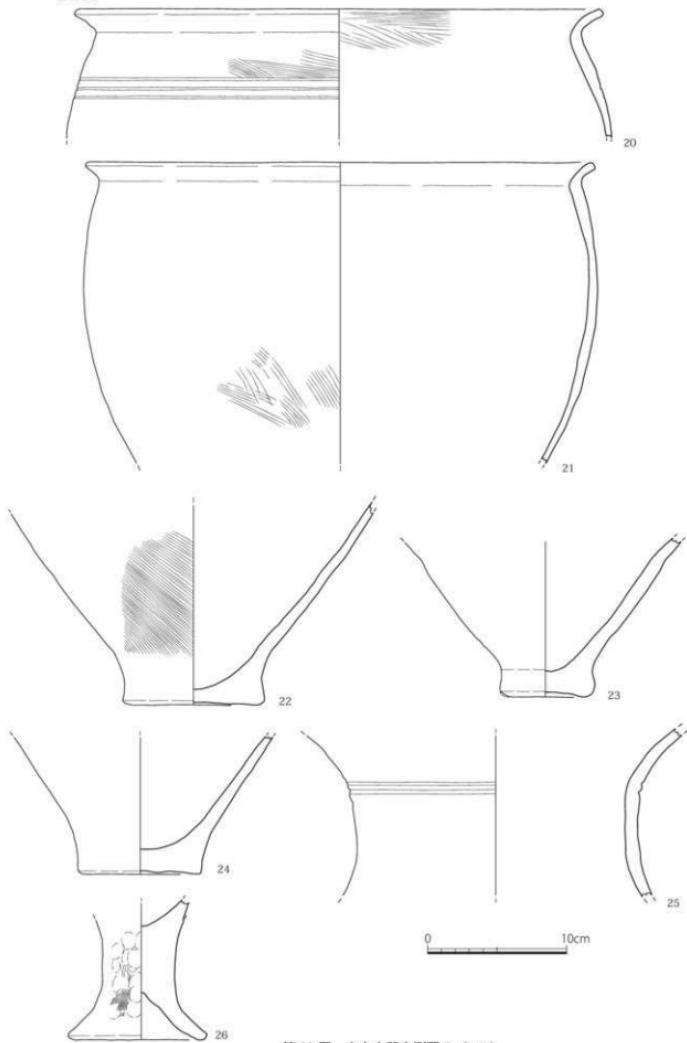
第22図 SK030・031・032・033・034 実測図 (1/60)

小型の砥石が出土した。

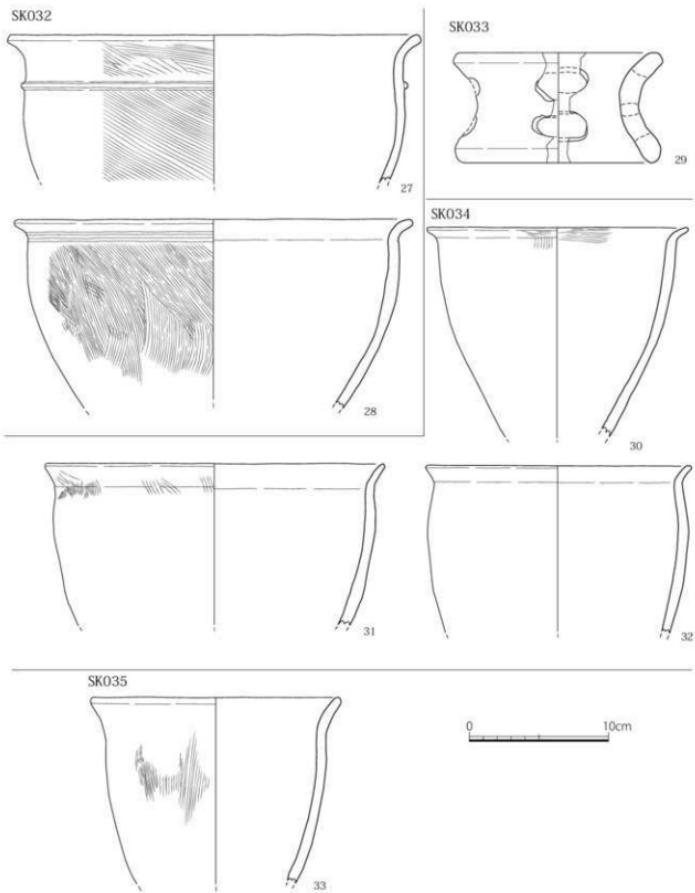
石器 84は砥石。断面方形の棒状を呈す。両端を欠き 4面の砥面を残している。表面は風化する。砂岩製。  
SK032 (第22・24図、図版8・14)

調査区中央のやや西寄りに位置する。SK030、SK033と接する。隅丸方形を呈し、一辺 220cm、深さ

SK030



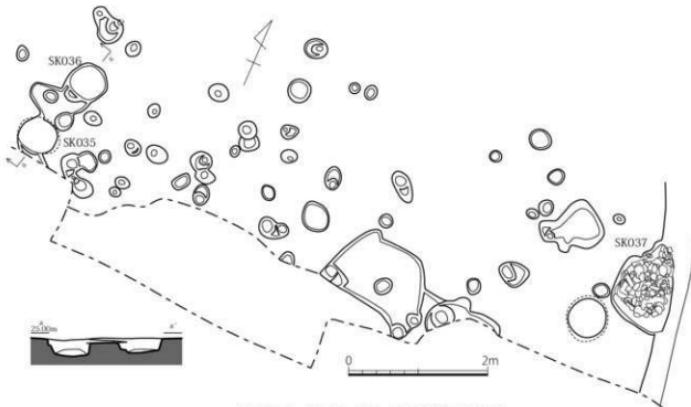
第23図 出出土器実測図5 (1/3)



第24図 出土土器実測図6 (1/3)

40cmを測る。弥生土器の甕、壺が出土した。壺は小片のため図示できなかった。

弥生土器 27・28は甕。いずれも口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁端部は短く外半した如意形をなす。27は胴部上半に細い突帯を、28は口縁直下に2条の沈線をめぐらす。27は復元口径



第25図 SK035・036・037 実測図 (1/60)

35.4cm、28は復元口径 29.0cmを測る。

**SK033** (第22・24・46図、図版8・14・17)

調査区中央のやや西寄りに位置する。SK031とSK032に接する。大型で隅丸長方形をなし、長辺370cm、短辺180cm、深さ35cmを測る。比較的まとまった量の弥生土器片が出土した。器種には甕、壺、高环、器台がある。また粘土塊、石斧などの石器が出土した。そのうち図化できた器台と石器を報告する。

弥生土器 29は器台。小型で二段の造かしをもつ。復元口径15.1cm、高さ7.95cmを測る。

石器 85はスクレーパー。完形で全長6.25cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmを測る。側縁の片面に剥離調整を行う。頁岩製。86は打欠石錐か。下方を欠く。片岩製。87は磨製石斧。刃部を欠く。やや薄いつくりである。安山岩質凝灰岩製。

**SK034** (第22・24図、図版9・14)

調査区南側のやや西寄りで検出した。SK033と接する。円形を呈し、直径180cm程、深さ40cmを測る。弥生土器の甕、壺が出土したが、壺は小片のため図示できなかった。

弥生土器 30～32は甕。いずれも口縁部から胴部中位にかけての破片である。口縁端部は短く外反した如意形となり、30は復元口径19.0cm、31は復元口径24.7cm、32は復元口径19.3cmを測る。

**SK035** (第24・25図、図版9・14)

調査区南側のやや西寄りに位置する。円形を呈し、直径60cm、深さ25cmを測る。弥生土器の甕片が少量出土した。

弥生土器 33は甕。口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁端部はゆるく外反する。復元口径18.0cmを測る。

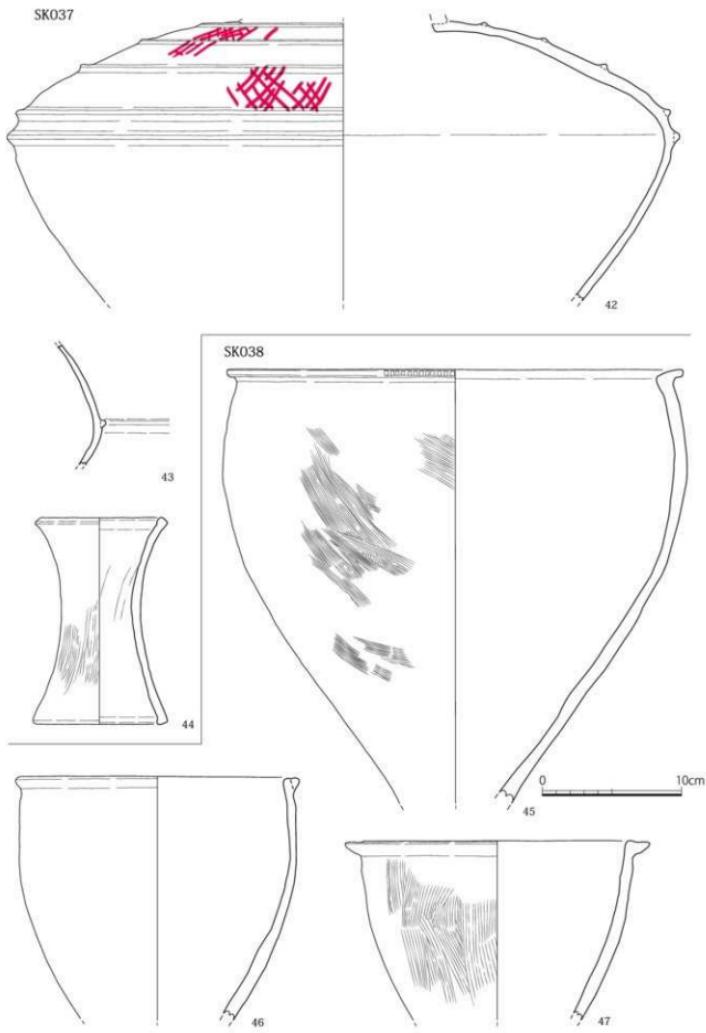
**SK036** (第25図、図版9)

調査区南側のやや西寄りで検出した。円形を呈し、直径60cm、深さ20cmを測る。弥生土器の甕、壺が出土したが、小片のため図示できなかった。

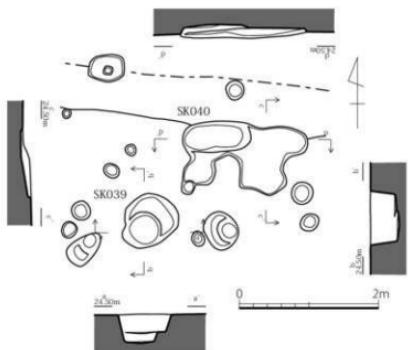
SK037



第26図 出土土器実測図7 (1/3)



第27図 出土土器実測図8 (1/3)

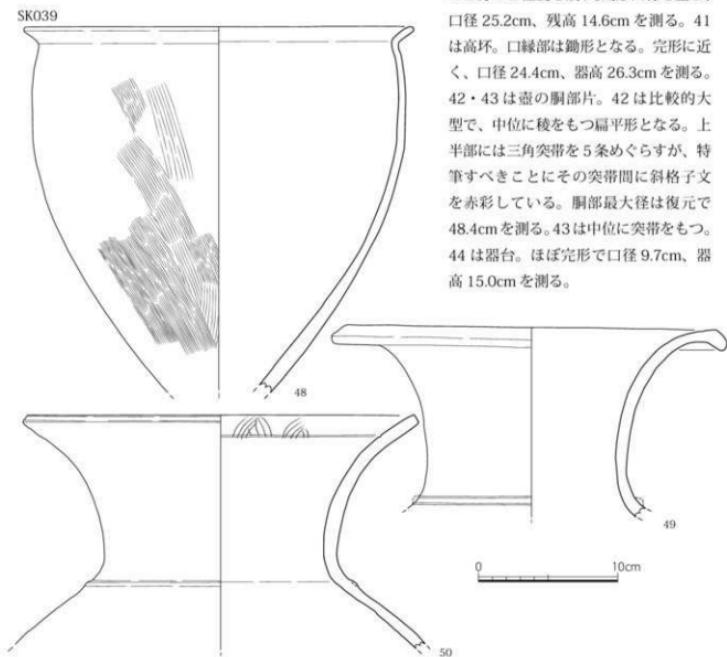


第28図 SK039・040 実測図 (1/60)

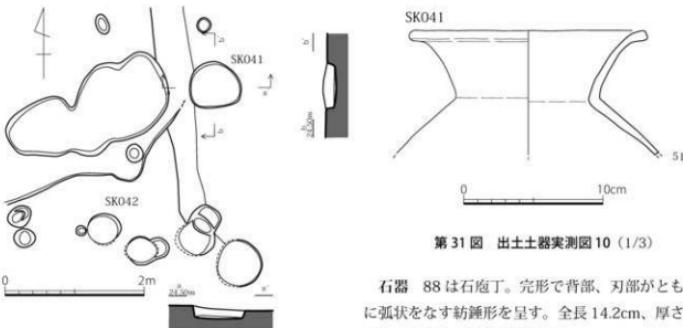
#### SK037 (第25～27・46、図版10・14・17)

調査区南側の中央で検出した。土坑の東側が地形削除で失われている。現状で長軸130cm、短軸90cmを測る。深さは不明である。甕、壺、高环など多量の弥生土器と石庖丁が出土した。

弥生土器 34～40は甕。34・35は口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部は鈍形に近く、いずれも胴部上半に三角突帯を1条めぐらす。34は復元口径31.2cm、35は復元口径29.8cmを測る。36～39は胴部下半から底部にかけての破片である。40は小型品で全体の3分の2程度を残す。鈍形口縁を呈し、口径25.2cm、残高14.6cmを測る。41は高环。口縁部は鈍形となる。完形に近く、口径24.4cm、器高26.3cmを測る。42・43は壺の胴部片。42は比較的大型で、中位に稜をもつ扁平形となる。上半部には三角突帯を5条めぐらすが、特筆すべきことにその突帯間に斜格子文を赤彩している。胴部最大径は復元で48.4cmを測る。43は中位に突帯をもつ。44は器台。ほぼ完形で口径9.7cm、器高15.0cmを測る。



第29図 出出土器実測図9 (1/3)



第30図 SK041・042 実測図(1/60)

第31図 出土器実測図10 (1/3)

石器 88は石庖丁。完形で背部、刃部がともに弧状をなす紡錘形を呈す。全長14.2cm、厚さ0.7cmを測る。灰色凝灰岩製。

SK038 (第5・27図、図版15)

調査区北側のやや西寄りで検出した。SK001と近接する。円形を呈し、直径65cm、深さ25cmを測る。弥生土器の甕、壺が少量出土したが、壺は小片のため図示できなかった。

弥生土器 45～47は甕。いずれも底部を欠く破片である。45の口縁部は、端部を短く外に折り返し先端に刻目を施す。復元口径33.0cmを測る。46は胴部の上縁に突帯をめぐらして口縁部をしている。復元口径20.0cmを測る。47も46と同様の破片で、胴部の上縁に突帯をめぐらして口縁部とする。復元口径22.2cmを測る。

SK039 (第28・29図、図版15)

調査区北側のやや西寄りで検出した。SK040と接する。円形を呈し、直径75cm程、深さ40cmを測る。弥生土器の甕、壺が少量出土した。

弥生土器 48は甕。底部を欠く破片で、復元口径29.0cmを測る。口縁部はくの字形をなす。49・50は壺。49は広口壺の口縁部片。口縁端部を大きく外反させる。口径28.7cmを測る。50の口縁部は喇叭形にひらき、端部内面には連弧状の文様を貝殻の腹縁を使って施文する。頸部には緩い突帯をめぐらす。復元口径28.6cm。

SK040 (第28・46図、図版17)

調査区北側のやや西寄りで検出した。SK039と接する。歪な平面プランで、長軸180cm、短軸100cm、深さ20cmを測る。少量の弥生土器片と石庖丁片が出土した。

石器 89は石庖丁。小片で残存部に穿孔途中の小穴を確認できる。灰色凝灰岩製。

SK041 (第30・31図、図版10・15)

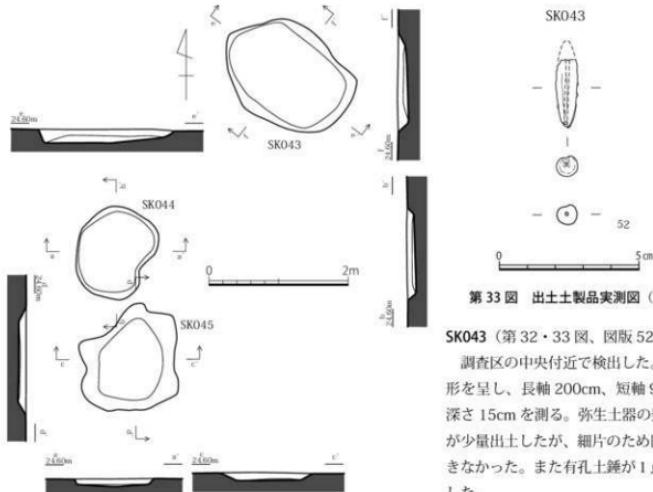
調査区のやや西寄りに所在する。円形を呈し、直径70cm程、深さ20cmを測る。少量の弥生土器が出土した。

弥生土器 51は広口壺。口縁部から胴部上半にかけての破片で、復元口径17.3cmを測る。

SK042 (第30・46図、図版17)

調査区のやや西寄りで検出した。円形プランで直径45cmを測る。深さは不明である。少量の弥生土器片と砥石が出土した。

石器 90は砥石。2面の砥面を残す小片である。砂岩製。



第32図 SK043・044・045 実測図 (1/60)



第34図 SK046 実測図 (1/60)

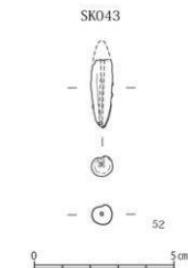
#### SK046 (第34図)

調査区北側の中央に位置する。楕円形を呈し、長軸 205cm、短軸 120cm、深さ 45cm を測る。少量の弥生土器が出土したが、小片のため図示できなかった。

#### SK047 (第35・47図、図版17)

調査区のほぼ中央で検出した。楕円形を呈し、長軸 170cm、短軸 140cm、深さ 15cm を測る。少量の弥生土器片に加え、石斧、石庖丁などの石器が出土した。

石器 91 は磨製石斧。ほぼ完形だが表面の風化が著しい。全長 13.1cm、最大厚 4.3cm を測る。安山



第33図 出出土製品実測図 (2/3)

#### SK043 (第32・33図、図版52)

調査区の中央付近で検出した。楕円形を呈し、長軸 200cm、短軸 95cm、深さ 15cm を測る。弥生土器の甕、壺が少量出土したが、細片のため図示できなかった。また有孔土錘が 1 点出土した。

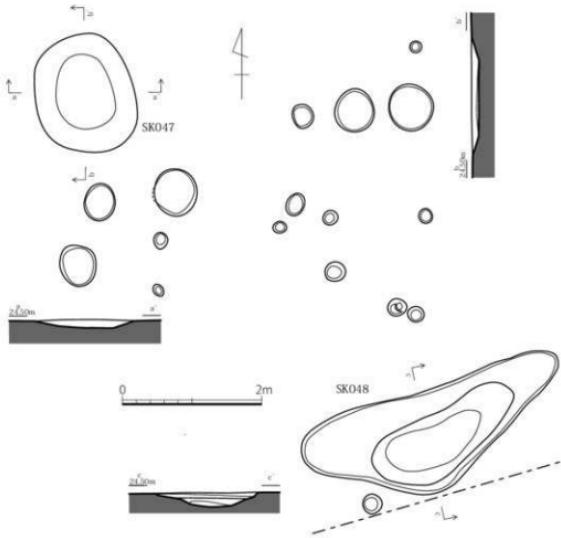
土製品 52 は有孔土錘。先端部を欠き、残存長 3.65cm を測る。形状から網漁に用いたものと思われる。

#### SK044 (第32図)

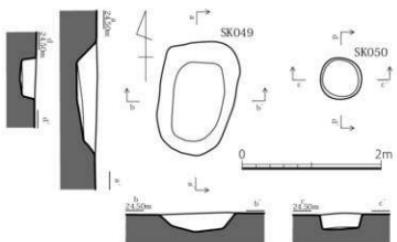
調査区のほぼ中央に位置する。SK045 に接する。円形を基調とし、径 120cm 程、深さ 10cm を測る。出土遺物は無かった。

#### SK045 (第32図)

調査区のほぼ中央に位置する。SB007、SK044 に接する。やや歪んだ方形プランで、一辺 120cm 程、深さ 10cm を測る。出土遺物は無かった。



第35図 SK047・048実測図(1/60)



第36図 SK049・050実測図(1/60)

岩質凝灰岩製。92は石庖丁。刃部の小片で、残存部に1ヶ所の穿孔を残す。貞岩製。93は叩石。全体の2分の1程度を残す。花崗岩製。

#### SK048(第35図)

調査区南側の中央で検出した。不整形な土坑で、長軸390cm、短軸140cm、深さ20cmを測る。弥生土器が少量出土したが、小片ため図示できなかった。

#### SK049(第36・37・48図、図版15・17)

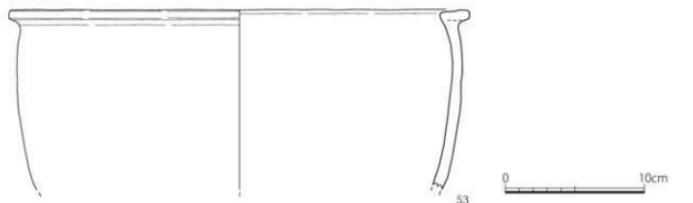
調査区中央のやや東寄りで検出した。

SK050と接する。開丸長方形を基調とし、長辺160cm、短辺110cm、深さ25cmを測る。弥生土器の甕、壺が出土したが、壺は小片のため図示できなかった。また磨製石斧が1点出土した。

弥生土器 53・54は甕。いずれも口縁部から胴部下半にかけての破片である。53は胴部の上縁に粘土帯をめぐらせ、短く外反する口縁として仕上げている。復元口径33.3cmを測る。54は緩いくの字口縁をもつ。口径23.8cmを測る。

石器 94は磨製石斧。刃部を欠く破片で、表面の風化が著しい。最大厚3.9cmを測る。安山岩質凝灰岩製。

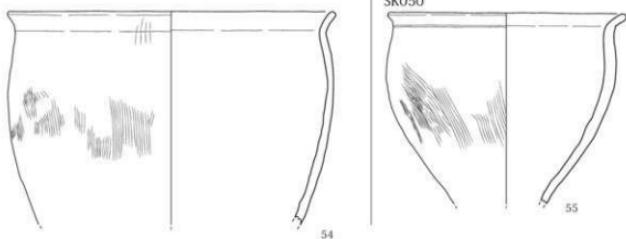
SK049



53

10cm

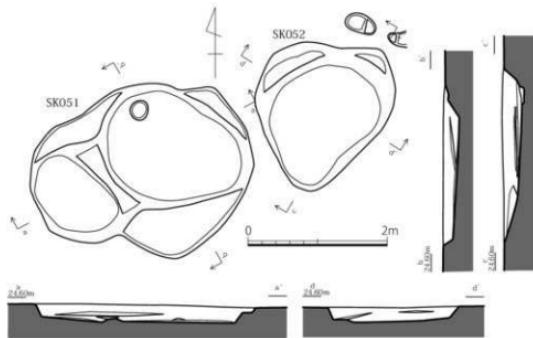
53



SK050

55

第37図 出土土器実測図 11 (1/3)



2.10m

2.15m

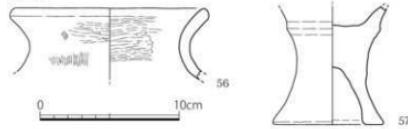
2.10m

2.15m

SK051

第38図 SK051・052 実測図 (1/60)

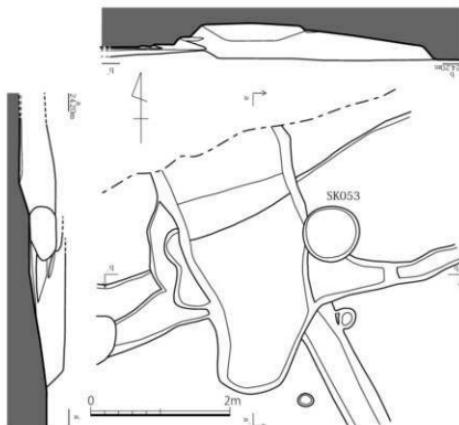
SK051



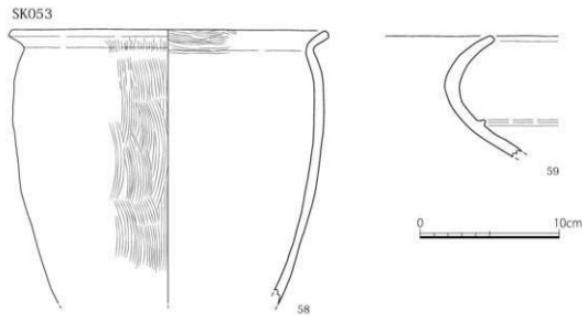
56

57

第39図 出土土器実測図 12 (1/3)



第40図 SK053 実測図 (1/60)



第41図 出土土器実測図 13 (1/3)

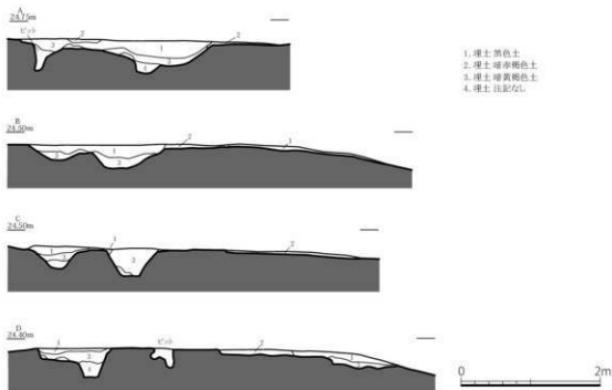
**SK050** (第36・37図、図版15)

調査区中央のやや東寄りで検出した。SK049と接する位置にある。円形を呈し、直径60cm、深さ20cmを測る。弥生土器の甕、高环が少量出土したが、高环は小片のため図示できなかった。

**弥生土器** 55は甕。底部を欠く破片で、全体の4分の3程度を残す。口縁部は如意形となる。復元口径17.3cm。

**SK051** (第38・39図、図版10・15)

調査区中央のやや東寄りで検出した。SK052と接する。大型な不整椭円形を呈し、長軸315cm、短軸230cm、深さ25cmを測る。比較的まとまった量の弥生土器片が出土した。器種には甕、壺、高环があるが、



第42図 SD055 断面図(1/60)

甕は小片のため図示できなかった。

弥生土器 56は壺。口縁部片で内面にミガキを施す。復元口径 14.4cm。57は高环か。脚部片で环部との境に緩い突帯をめぐらす。

#### SK052 (第38図、図版10)

調査区中央のやや東寄りに位置する。SK051と接する。やや崩れた三角形を呈し、一辺 200cm 程、深さ 30cm を測る。弥生土器の甕と壺が少量出土したが、小片のため図示できなかった。

#### SK053 (第40・41図、図版11・15)

調査区北側の東に位置する。やや歪な大型の長方形を呈し、北側は調査区外に広がっている。現状で長辺 360cm、短辺 190cm、深さ 50cm を測る。弥生土器の甕、壺が出土した。

弥生土器 58は甕。口縁部から胴部下半にかけての破片である。口縁部はくの字形をなし、復元口径 23.2cm を測る。59は壺。口縁部から胴部上半にかけての破片で、胴部の上位に三角突帯を 1 条めぐらす。

#### (4) 溝

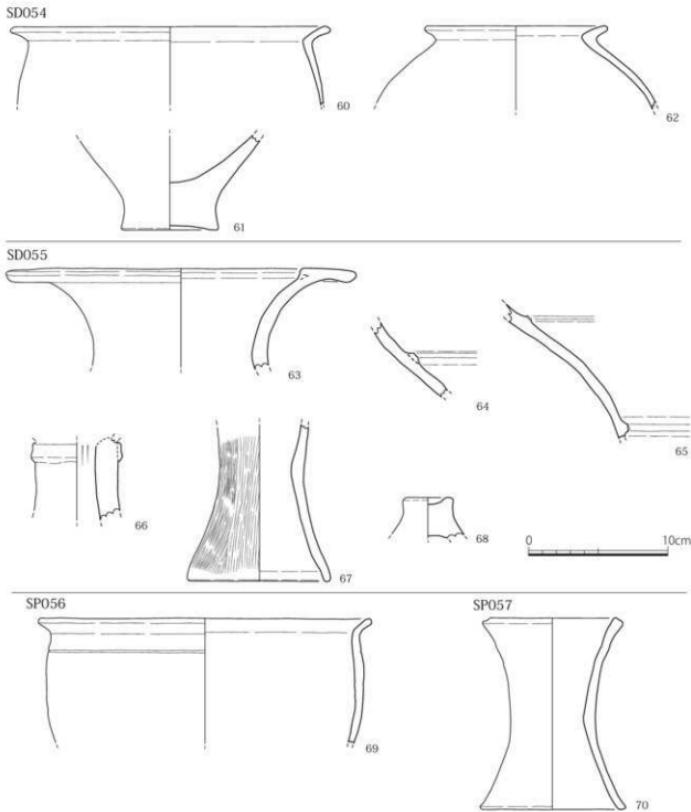
調査区では数条の溝状遺構を検出したが、ここでは遺物の出土した 2 条の溝を報告する。

#### SD054 (第4・43・50図、図版11・15・18)

調査区北側のほぼ中央で検出した。南北方向に伸びており、その北側は段の削平により遺存しない。検出できた範囲で、長さ 3.5m、最大幅 0.9m 程を測る。少量の弥生土器と管玉が 2 点出土した。

弥生土器 60・61は甕。60は口縁部片。口縁はくの字形を呈し、復元口径 22.6cm を測る。61は底部の破片。62は壺。口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁はくの字形を呈し、復元口径 13.0cm を測る。

管玉 102・103は管玉。102は完形。長さ 2.1cm、幅 0.5cm を測る。103は 3 分の 1 程度を欠き、残長 1.4cm、幅 0.5cm を測る。いずれも表面を研磨して仕上げており、石製工具を用いて穿孔したものと考えられる。穿孔の方向ははっきり分からず。石材は硬質の緑色凝灰岩を用いている。

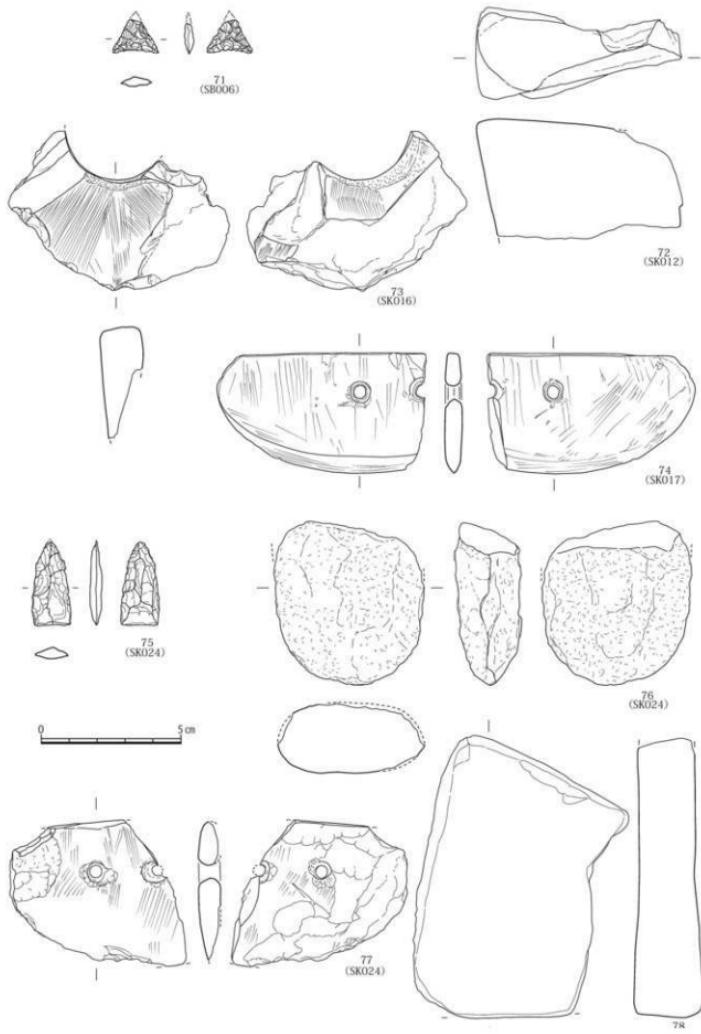


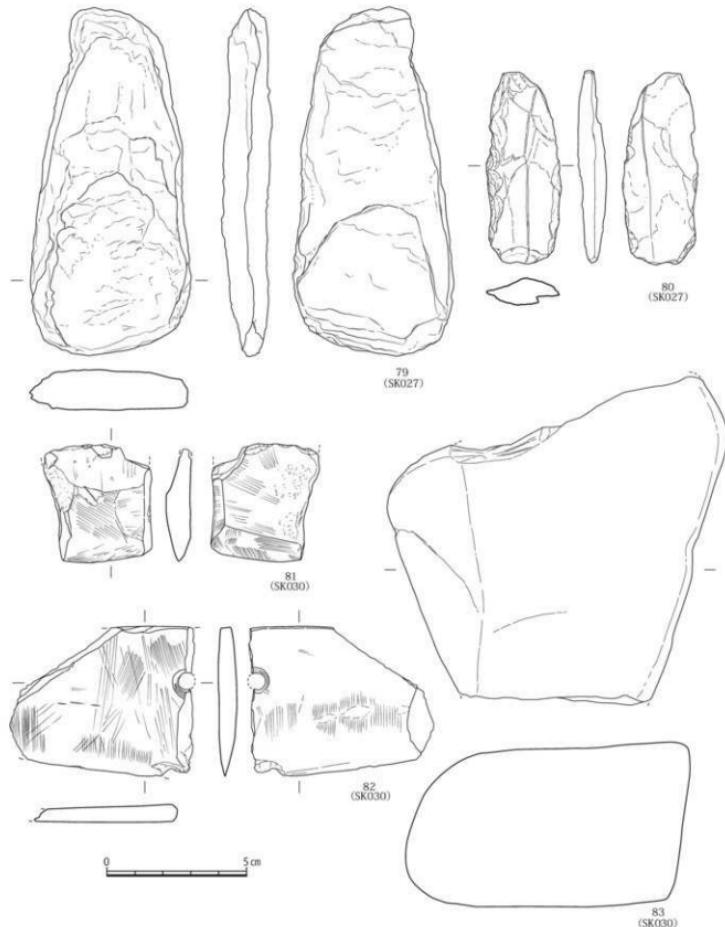
第43図 出出土器実測図14 (1/3)

**SD055** (第4・42・43・48・49図、図版11・12・15・18)

調査区北側の東から中央にかけて東西方向に伸びる。検出できた範囲で、長さ52m、幅1~3mを測る。調査時に4ヶ所においてベルトを残して断面図を作成した(第42図)。測量した地点によって違いがあるものの、現状で概ね40cm程の深さを持つ。壺や高环など少量の弥生土器と石鎚、石斧などの石器が出土した。

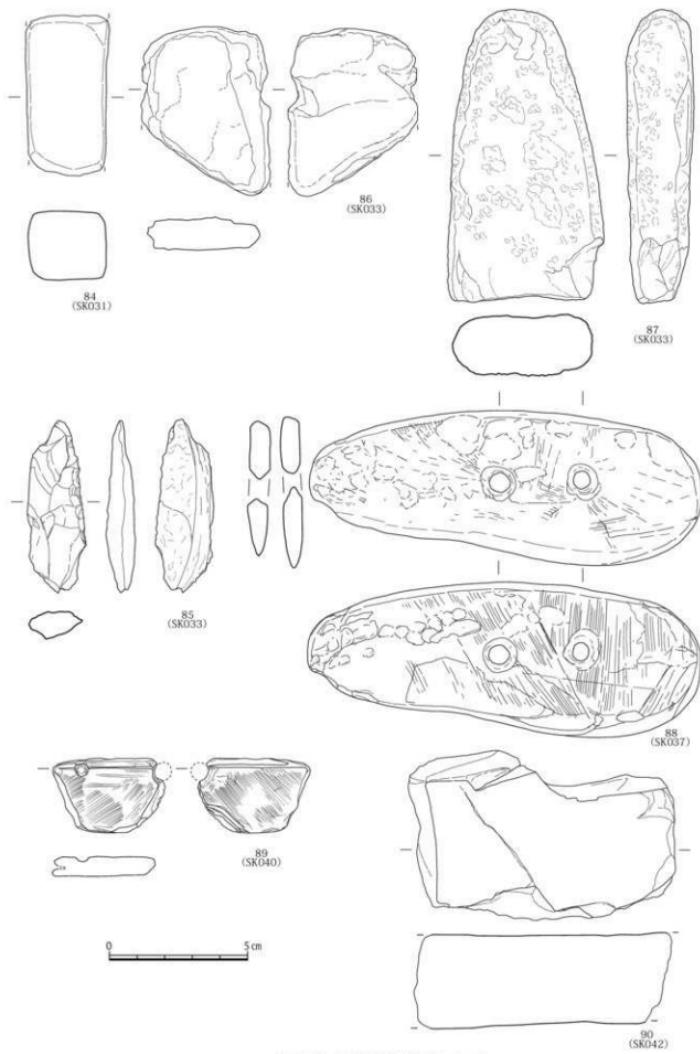
**弥生土器** 63~65は壺。63は口縁部から頸部にかけての破片である。やや外反する鉤形口縁を呈す。



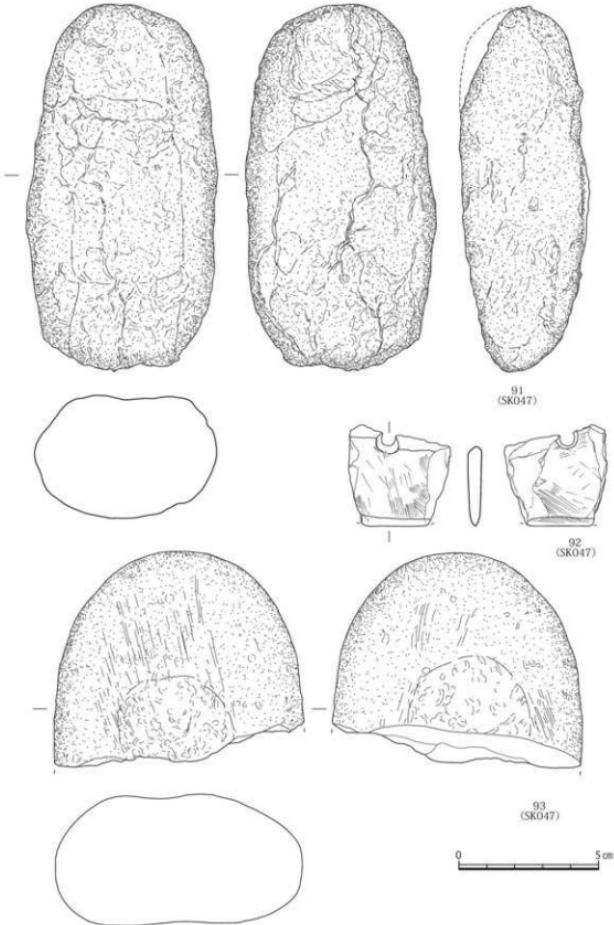


第45図 出土石器実測図2 (2/3)

復元口径 17.7cm。64・65は胴部片。64には1条、65には2条の突帯をめぐらす。66は高環。脚部上半の破片で、环部との接合面で剥離する。上位に帯状の低い突帯をめぐらす。67は器台。上半を欠く破片で、



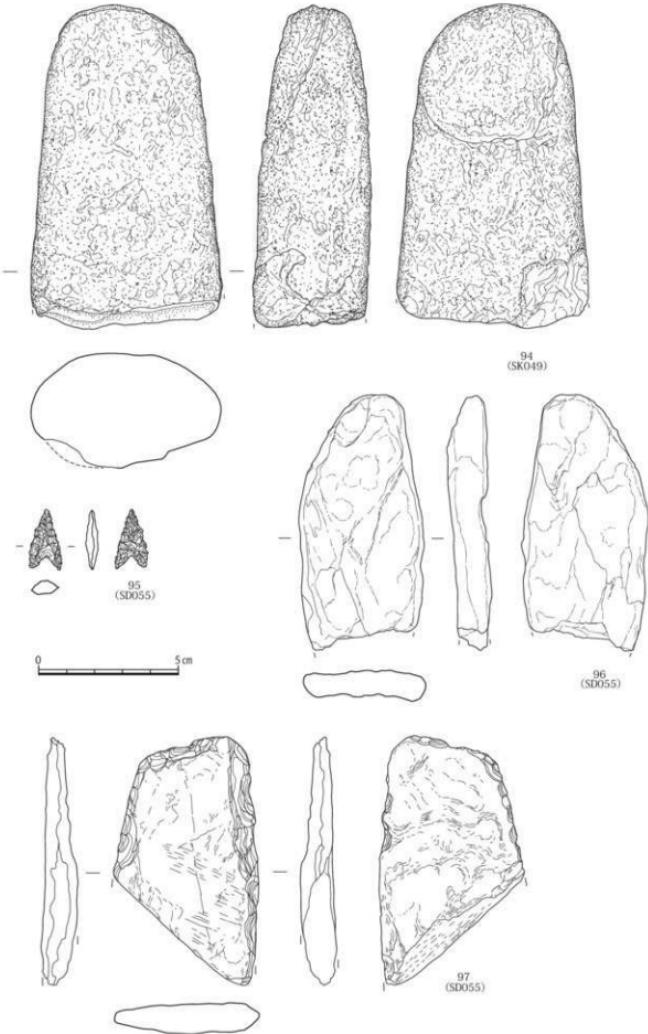
第46図 出土石器実測図3 (2/3)



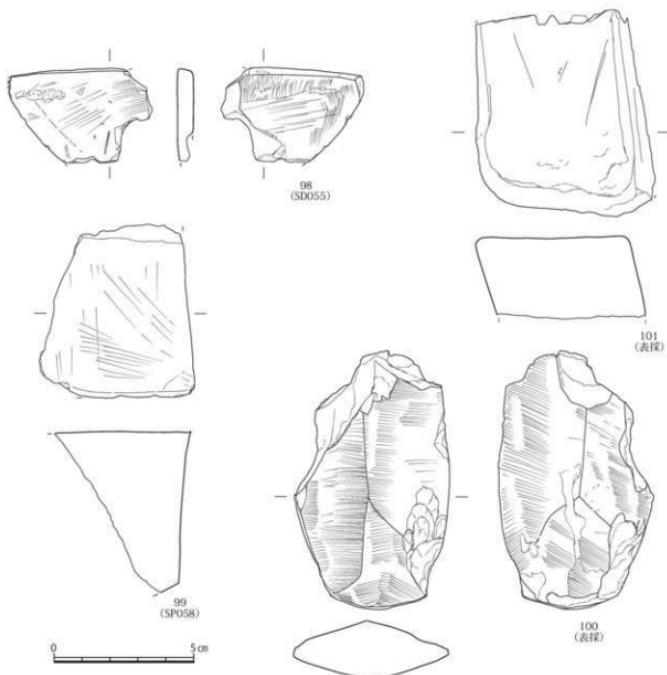
第47図 出土石器実測図4 (2/3)

全体の3分の2程度を残す。67は蓋か。つまみ部の小片である。

石器 95は打製石鎌。凹基式。完形で全長2.2cm、最大幅1.2cm、最大厚0.5cmを測る。石材は姫島産の黒曜石を用いる。96・97は扁平打製石斧。いずれも刃部を欠き、96は最大厚0.9cm、97は最大厚



第48図 出土石器実測図5 (2/3)



第49図 出土石器実測図6 (2/3)

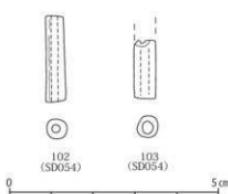
1.0cmを測る。ともに片岩製。98は石庖丁。背部から刃部にかけての小片である。灰色凝灰岩製。

(5) 柱穴 (第43・49図、図版15・18)

調査区では多くの柱穴を検出した。柱穴出土の土器、石器のうち主要なものだけを以下に報告する。

弥生土器 69は甕。口縁部から胴部上半にかけての破片である。如意形口縁をなし、胴部の上位に1条の沈線をめぐらす。復元口径24.2cmを測る。SP056出土。70は器台。全体の4分の3程度を残し、口径9.5cm、器高13.7cmを測る。SP057出土。

石器 99は砥石。4面の底面を残す破片である。砂岩製。SP058出土。



第50図 出土管玉実測図 (1/1)

番号	出土遺物	種別	縦幅	横幅(cm)	断面	構成	土色	堆分	備考
1	31003	住土土器	基	復元13.7 復元16.5	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黒12.5V 5/1, 淡黄褐色10V 6/6 外: 黄褐色13.7V, 因剥10V 6/2	剥離～直剥 片
2	30006	住土土器	便	復元2.5 復元底径2.7	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/1, 淡黄褐色10V 7/3	剥離片
3	30006	住土土器	便	復元2.6 復元底径2.9	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/1 外: 黄褐色13.5V	剥離片
4	30006	住土土器	便	復元2.4 復元底径2.4	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/1	剥離片
5	30011	住土土器	便	復元16.7 復元底径14.7	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 7/4 外: 淡黃褐色10V 5/2, 剥離13V 7/6	山壁剥～直剥 片
6	30011	住土土器	便	復元3 復元底径16.4	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	中空不良	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/1, 淡黄褐色10V 7/4	1/3程度 透S-L1段
7	30014	住土土器	便	復元9 復元底径20.3	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 7/4, 黄褐色13.5V 7/3 外: 黄褐色13.5V, 剥離12V 2/4	山壁剥～直剥 片
8	30014	住土土器	便	復元10 復元底径17.4	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/1 外: 黄褐色13V 3/1	山壁剥～直剥 片
9	30017	住土土器	便	復元4 復元底径14.8	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 6/6, 剥離13V 7/6 外: 黑12.5V 6/6, 剥離13V 6/6	山壁剥～直剥 片
10	30018	住土土器	便	復元10.0 復元底径12.2	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 2/4	山壁剥片
11	30018	住土土器	便	復元2.6 復元底径6.0	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/1 外: 黑12.5V 6/6	剥離片
12	30018	住土土器	便	復元2.3 復元底径2.9	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 6/2 外: 黑12.5V 6/6	剥離片
13	30020	住土土器	便	復元23.9 復元底径22.6 復元19.4 復元底径16.0	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ～タテハラ 内:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 2/3	1/3程度
14	30020	住土土器	便	復元12.6 復元底径20.6 復元10.6	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ～タテハラ 内:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/1 外: 黑12.5V 6/6, 剥離13V 6/6	山壁剥～直剥 片
15	30021	住土土器	便	復元10.6 復元底径10.6 復元10.6	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/1 外: 黑12.5V 6/2, 黄褐色13V 6/6	剥離片
16	30024	住土土器	便	復元12.7 復元底径8.2 復元10.6	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 6/6, 剥離13V 6/6 外: 黑12.5V 6/2, 剥離13V 7/6	山壁剥
17	30027	住土土器	便	復元10.6 復元底径19.45 復元10.6	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	中空不良	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 7/4, 黄褐色13V 7/3 外: 黑12.5V 7/4, 剥離13V 6/4, 剥離13V 6/4	1/3程度
18	30027	住土土器	便	復元8.3 復元底径10.6	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	中空不良	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 7/4, 黄褐色13V 7/3 外: 黑12.5V 7/4, 剥離13V 6/4	1/3程度 透S-L2段
19	30027	住土土器	便	復元13.8 復元底径10.0	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 6/2	剥離片
20	30028	住土土器	便	復元9.0 復元底径10.36 復元10.6	内:ヨコナラ～ヨコハラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 5/6	山壁剥片
21	30028	住土土器	便	復元11.0 復元底径12.2	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ～タテハラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 7/2, 淡黄褐色10V 6/2	山壁剥～直剥 片
22	30028	住土土器	便	復元11.7 復元底径10.3	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ～タテハラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 7/2, 黄褐色13V 6/6	剥離～直剥 片
23	30030	住土土器	便	復元11.5 復元底径9.9	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2	剥離～直剥 片
24	30030	住土土器	便	復元12.9 復元底径9.9	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 7/2, 剥離13V 7/2	剥離～直剥 片
25	30030	住土土器	便	復元11.2 復元底径9.9	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2	剥離片
26	30030	住土土器	便	復元16.2 復元底径16.0 復元14.8 復元底径14.8	内:ヨコナラ～タテハラ・オサヌ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 7/4	剥離片
27	30032	住土土器	便	復元11.7 復元底径10.4	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 6/4	山壁剥～直剥 片
28	30032	住土土器	便	復元13.7 復元底径12.6	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 7/2, 黄褐色13V 5/2	山壁剥
29	30032	住土土器	便	復元2.95 復元底径2.95	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	中空不良	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 3/1	1/3程度 透S-L2段
30	30034	住土土器	便	復元11.5 復元底径10.9	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 6/2	山壁剥～直剥 片
31	30034	住土土器	便	復元11.7 復元底径10.47	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 5/2, 剥離13V 6/6	山壁剥～直剥 片
32	30034	住土土器	便	復元11.5 復元底径10.8	内:ヨコナラ 外:ヨコナラ	直柱	黒頭～白頭の断面を多く含む	内: 黑12.5V 5/2 外: 黑12.5V 6/2, 剥離13V 7/4	山壁剥～直剥 片

表1 出土遺物観察表1

表2 出土遺物觀察表2

番号	出土遺物	種別	器種	法長(cm)	断面	表面	粘土	色調	現存	備考
65	SD005	陶生土器	直	径9.8 厚0.8	P1: リコナヂ P2: リコナヂ	直井 横幅~2mmの台形側面 多く含む	内井: 横井側2.0mm 6%	黒井戸		
66	SD005	陶生土器	高井	径9.3 厚0.7	P1: リコナヂ+レジン P2: リコナヂ	直井 横幅~3mmの台形側面 多く含む	内井: 横井側2.0mm 5.6 外井: 深井側 5.9	黒井戸		
67	SD005	陶生土器	鋸台	径9.1 厚0.6	P1: リコナヂ P2: リコナヂ+タマハラ	直井 横幅~3mmの台形側面 多く含む	内: 横井側 6.6 外: 横井側2.0mm 5.6 外: 深井側 6.6	2/3程度		
68	SD005	陶生土器	直	径9.2 厚0.6	P1: リコナヂ P2: リコナヂ	直井 横幅~3mmの台形側面 多く含む	内井: 横井側2.0mm 7.7 外: 横井側 7.7/1	黒井戸片		
69	SP006	陶生土器	直	径9.0 厚0.6	P1: リコナヂ P2: リコナヂ	直井 横幅~3mmの台形側面 多く含む	内: 横井側2.0mm 8.2 外: 横井側 8.6, 深井側7.0mm 5.3	白壁井戸 直井		
70	SP007	陶生土器	鋸台	径8.3 厚0.5	P1: リコナヂ P2: リコナヂ	直井 横幅~3mmの台形側面 多く含む	内井: 横井側2.0mm 6.6 外: 深井側 7.0mm 6.6	1/3程度		
71	SD006	石器	打製石器	内径1.2 幅1.6 厚0.35 重量10.0kg	—	—	細孔 表面を滑らか	灰2.0mm 5/1	丸端頭火候 圓底式	
72	SD012	石器	砾石	内径0.3 幅0.4 厚0.3 重量10.0kg	—	—	砂岩	灰2.5mm 7/2	小井 画面口2面	
73	SD016	石器	打製石器	内径0.7 幅0.9 厚0.3 重量9.0kg	—	—	端面質直道	灰白10mm 7/1	小井	
74	SD017	石器	研磨丁	内径0.4 幅0.5 厚0.6 重量22.6kg	—	—	漆黑色板岩	灰2.5mm 6/1	1/3程度	
75	SD029	石器	打製石器	内径0.5 幅0.4 厚0.4 重量1.7kg	—	—	安山岩	灰10mm 7/1	丸打火形 平底式	
76	SD024	石器	擦刮石器	内径0.5 幅0.4 厚0.5 重量10.7kg	—	—	安山岩質端面	モーラー灰2.5mm 6/1	石器 表面が風化	
77	SD024	石器	研磨丁	内径0.3 幅0.3 厚0.8 重量23.7kg	—	—	漆黑色板岩	褐2.5mm 5/1	1/3程度	
78	SD024	石器	砾石	内径0.1 幅0.7 厚0.7 重量24.9kg	—	—	砂岩	灰2.5mm 7/2	砾井 画面口2面	
79	SD027	石器	研磨丁	内径1.1 幅1.7 厚0.7 重量17.9kg	—	—	砂岩	褐2.5mm 6/1	丸井	
80	SD027	石器	米乳品	内径0.8 幅0.7 厚0.95 重量17.3kg	—	—	頁岩	灰2.0mm 6/2	丸井	
81	SD030	石器	砾石	内径0.7 幅1.0 厚0.9 重量17.0kg	—	—	灰色端面	灰2.5mm 7/1	石器 研磨丁輪用具	
82	SD030	石器	研磨丁	内径0.45 幅0.6 厚0.8 重量31.7kg	—	—	頁岩	灰2.5mm 5/1	1/3程度	
83	SD030	石器	砾石	内径0.1 幅0.7 厚0.7 重量1.0kg	—	—	砂岩	灰10mm 7/1	砾井 画面口2面	
84	SD031	石器	砾石	内径0.8 幅1.5 厚0.5 重量0.5kg	—	—	砂岩	灰白10mm 6/2	高層火堆 表面が風化	
85	SD033	石器	スクレーパー	内径0.25 幅0.9 厚0.9 重量1.9kg	—	—	頁岩	灰2.0mm 4/1	丸井	

表3 出土遺物観察表3

番号	出土遺物	種別	器種	出雲(㎝)	面形	側面	底面	色調	保存	備考
86	SH033	石器	石鏟	刃長6.1 幅1.5 厚1.1 重量60.32g	—	—	月鉈	セラーヴルセメント	黄鉄片	
87	SH033	石器	鋸割形石器	刃長0.7 幅0.7 厚0.25 重量45.15g	—	—	安山岩質鋸形石器	セメント	月鉈矢頭	
88	SH037	石器	石刀	刃長3.5 幅1.2 厚0.2 重量5.5g	—	—	灰色鋸形石器	セメント	元形	鋸形
89	SH040	石器	石刀	刃長2.7 幅0.7 厚0.2 重量10.75g	—	—	灰色鋸形石器	セメント	小片	
90	SH042	石器	石刀	刃長6.1 幅0.7 厚0.2 重量14.9g	—	—	砂岩	セメント	黄片	圓面(13mm)
91	SH047	石器	鋸割形石器	刃長0.7 幅0.5 厚0.2 重量4.5g	—	—	安山岩質鋸形石器	セラーヴルセメント	元形	
92	SH047	石器	石刀	刃長0.7 幅0.5 厚0.2 重量5.0g	—	—	月鉈	セメント	小片	
93	SH047	石器	石刀	刃長0.5 幅0.5 厚0.2 重量17.5g	—	—	月鉈	セメント	1/2直角	
94	SH049	石器	鋸割形石器	刃長11.8 幅0.8 厚0.3 重量23.5g	—	—	安山岩質鋸形石器	セメント	月鉈矢頭	
95	SH055	石器	鋸割形石器	刃長2.2 幅0.7 厚0.5 重量5.5g	—	—	船形地盤形	セメント	元形	圓盤式
96	SH055	石器	石刀	刃長0.9 幅0.5 厚0.2 重量7.79g	—	—	月鉈	セメント	月鉈矢頭	
97	SH055	石器	石刀	刃長1.15 幅0.7 厚0.1 重量5.92g	—	—	月鉈	セラーヴルセメント	月鉈矢頭	
98	SH055	石器	石刀	刃長0.9 幅0.5 厚0.2 重量4.17g	—	—	灰色鋸形石器	セメント	小片	
99	SP058	石器	石刀	刃長0.2 幅0.5 厚0.4 重量36.60g	—	—	砂岩	セメント	小片	圓面(14mm)
100	表模	石器	鋸割形石器	刃長0.25 幅0.5 厚0.2 重量25.80g	—	—	灰色鋸形石器	セメント	黄鉄片	
101	表模	石器	石刀	刃長0.4 幅0.5 厚0.3 重量25.80g	—	—	砂岩	セメント	小片	
102	SH054	石製品	管状	刃長0.5 幅0.5 厚0.5 重量6.82g	—	—	灰色鋸形石器	セメント	元形	
103	SH054	石製品	管状	刃長0.4 幅0.5 厚0.3 重量6.41g	—	—	灰色鋸形石器	セメント	1/3直角	

表4 出土遺物観察表4

(6) 採集遺物 (第 49 図、図版 18)

表面採集遺物に弥生時代の石器がある。

石器 100 は磨製石剣。刃部下半から基部にかけての破片である。鎌は明瞭で断面形は菱形になる。幅 5.5cm、最大厚 2.1cm を測る。灰色凝灰岩製。101 は砥石。一方の端部を欠く小片で、3 面の砥面を残す。砂岩製。

## 第 4 章 下崎三反間遺跡

下崎三反間遺跡は、行橋市大字下崎 481-1 番地に所在する。標高 21.5m 前後の中位段丘上に立地する。調査面積は約 850m<sup>2</sup> である (第 52 図、図版 18)。

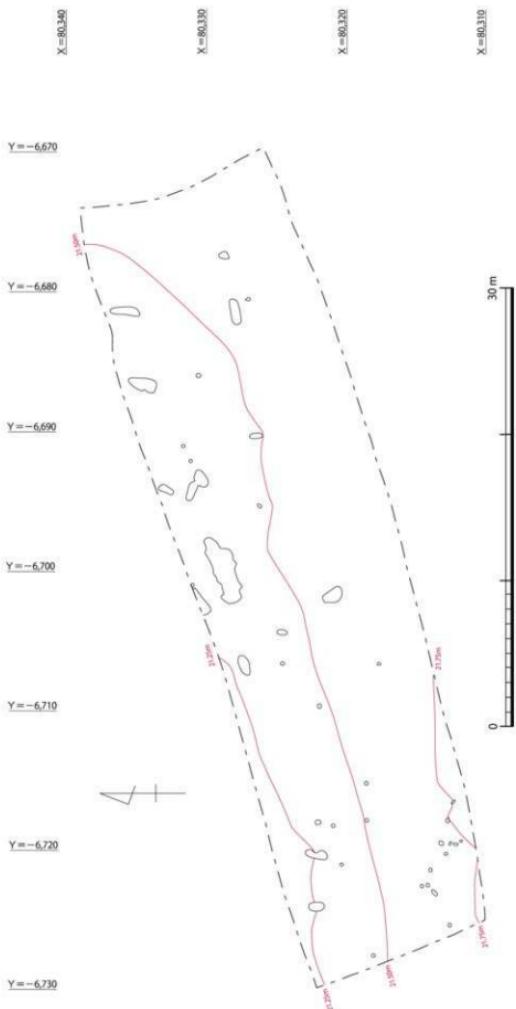
調査の結果、15 基程度の土坑状の落ち込みを検出したが出土遺物はまったく無く、はっきりと遺構としての認定ができなかった。このことは検出面の標高がすぐ南に隣接する下崎丸山遺跡に比して 2.5m も低いため、下崎丸山遺跡からさらに北側へ広がっていたであろう遺跡は、すでに削平を受けたものと理解することができる。しかしながらこの見解も、出土遺物はもちろんのこと採集遺物すら皆無であったことを考慮すると、そもそも遺跡は無かったとする結論も視野に入れておく必要があろう。

以上より、本調査で検出した土坑状の落ち込み等は、風倒木の痕跡など自然由来のものである可能性が高いと考えられる。なお、落ち込みの検出面の地山は黄褐色ないし赤褐色の風化火山灰層で、下崎丸山遺跡のそれと同様であった。



第 51 図 発掘調査の様子

第52図 下崎三反面道路構配図 (1/300)



## 第5章 結語

以上、下崎丸山遺跡、下崎三反間遺跡の2遺跡の発掘調査成果を報告してきた。最後に結語として、各遺跡の総括を行い、今回検討できなかった課題等を提起したい。

下崎丸山遺跡では竪穴建物3軒、掘立柱建物5棟、数条の溝、多くの土坑、柱穴を確認した。出土した弥生土器の様相（武末・上田 2006）より、弥生時代の前期末（板付IIc式期）から中期前半（須玖I式期）にかけて営まれた集落遺跡であることが分かった。周辺では同時期の集落遺跡として、西方の谷底平野に広がる入覚大原遺跡が知られている（行橋市教育委員会 2014）。入覚大原遺跡は下崎丸山遺跡より存続期間が長く、中期後半（須玖II式期）まで続出し、当該期の墓地空間も調査されている。続く弥生時代の後期には、下崎丸山遺跡の北にある下崎ヒガンデ遺跡に生活の拠点を移したと考えられる。この遺跡の詳細な報告はまだ行われていないが、弥生時代後期に位置づけられる竪穴建物83軒、掘立柱建物30棟などが調査されている（辛嶋 2006）。この地域の集落動態については、今後下崎ヒガンデ遺跡の調査報告書刊行時に改めて検討したい。

次に個々の遺構について検討を行いたい。竪穴建物は3軒検出した。いずれも削平を受けており良好に遺存するとはいえないが、SI002では主柱穴を6本確認した。SI003も同様の構造と思われ、主柱穴の平面形が多角形となることから、円形多主柱の竪穴住居であったと考えられる（坂元 2006）。掘立柱建物は5棟検出した。1間×1間の建物が3棟、1間×2間が1棟、もう1棟は調査区外へ広がるため構造は明確でない。いずれも総柱の建物であることから、住居ではなく高床の倉庫であったと考えるのが妥当であろう。土坑には大小があるが、そのうち断面袋状のものは貯蔵穴と考えられる。特に規模の小さいものは2~4基まとめて分布する傾向がうかがえる。

遺物は多くの弥生土器が出土したが、特徴的な器種に透かしをもつ小型の器台があった。3点分の破片が出土したが、口径14cm、高さ8cm程度に復元できる。周辺ではあまり類例をみないので、1つの地域色をあらわす遺物の可能性がある。また石器も比較的多く出土した。例えば石庖丁には、飯塚市の立岩遺跡で製作された赤紫色泥岩（鉄縫凝灰岩）があり、弥生時代の交易範囲を考える上で重要な資料になると考えられる。ただ石材の観察はいずれも肉眼によるものなので、将来的には地球科学的分析を踏まえた岩石名の再同定を行う必要があるろう。

下崎三反間遺跡は本編で述べたように、今回の調査では明確な遺構を確認することができなかった。このことは下崎丸山遺跡で確認した集落遺跡の範囲を決める重要な材料となるが、今回の調査地点が大きく開削されて旧状を保っていないことから、この点は今後に課題を残すこととなった。

### 〈引用・参考文献〉

- 辛嶋智恵子 2006 「下崎ヒガンデ遺跡」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市）  
坂元雄紀 2006 「遠賀川流域以東における弥生集落の成立と展開」「弥生集落の成立と展開」（第55回埋蔵文化財研究集会）  
武末純一・上田龍児 2006 「弥生土器の編年と地域間交流」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市）  
行橋市教育委員会 2014 「入覚大原遺跡・天サヤ池西古墳群・下崎瀬戸溝遺跡」（行橋市文化財調査報告書第51集）  
※結語をまとめるにあたり、以下の方々に有益なご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。（敬称略）  
上田龍児・森貴教（大野城市教育委員会）、能登原孝道（熊本県教育委員会）

+

L

# 図 版

+

+

L

+

L



(1960年6月5日撮影 国土地理院発行を転載)

下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡の位置

図版2 遺跡遠景



下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡遠景（南から）

1. SI001 (南から)



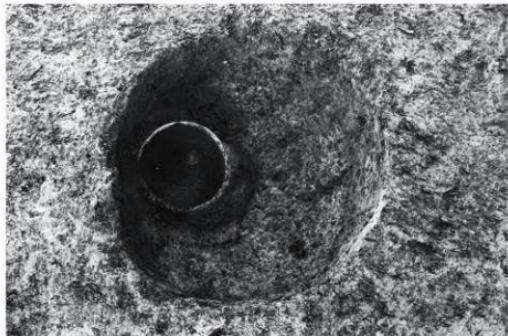
2. SI002 (北から)



3. SI003 (北から)



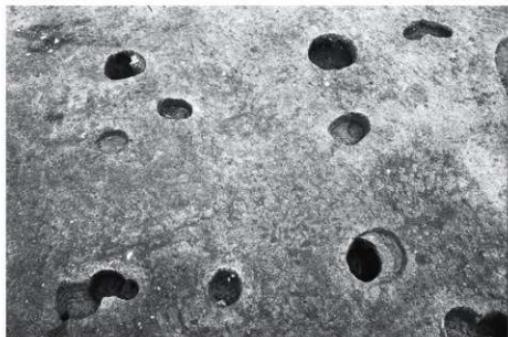
図版4 下崎丸山遺跡



1. SI003 土器出土状況

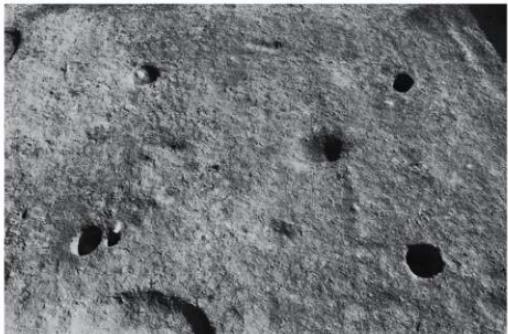


2. SB005 (南から)



3. SB006 (南から)

1. SB007 (北から)



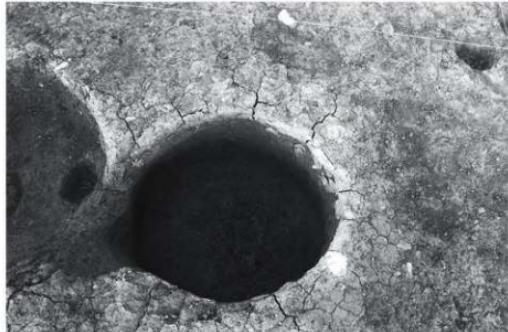
2. SB008 (西から)



3. SK010・011・012・013  
(北から)



図版6 下崎丸山遺跡



1. SK017 (東から)



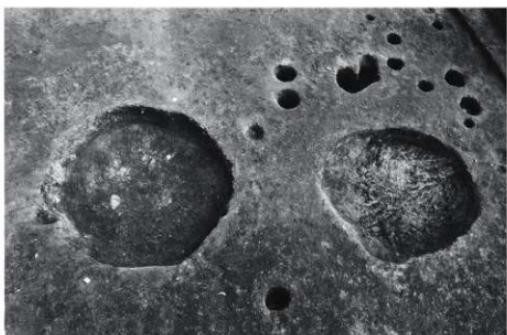
2. SK019 (北から)



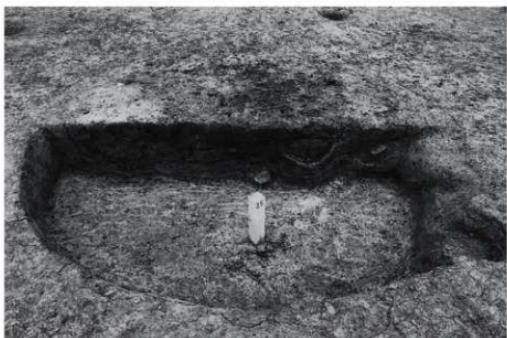
3. SK020 (東から)



1. SK024・025 (北から)



2. SK026・027 (西から)



3. SK027 半裁

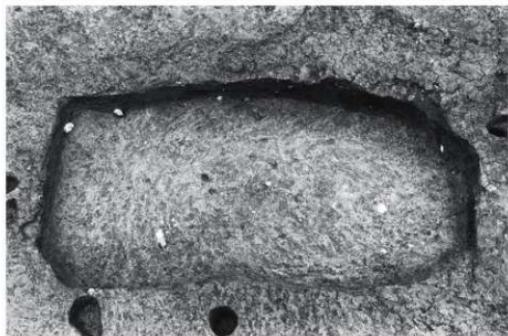
図版8 下崎丸山遺跡



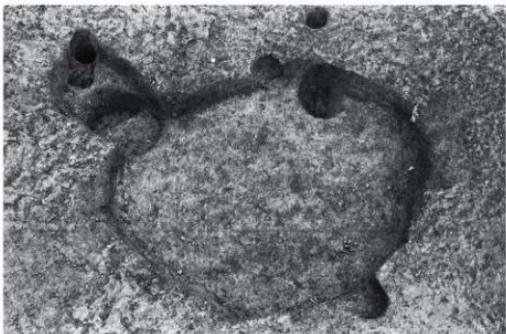
1. SK030 (西から)



2. SK032 (南から)



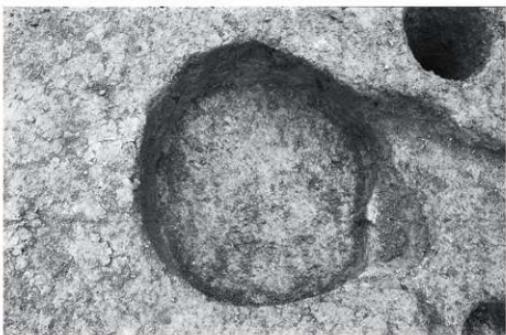
3. SK033 (南東から)



1. SK034 (東から)



2. SK035 (西から)

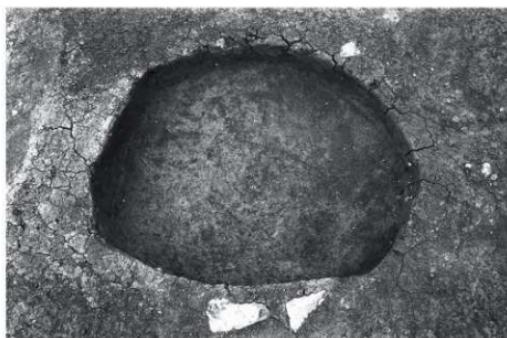


3. SK036 (西から)

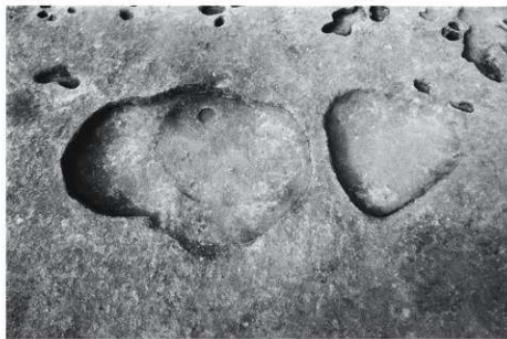
図版 10 下崎丸山遺跡



1. SK037 (東から)



2. SK041 (南から)



3. SK051・052 (南から)



1. SK053 (東から)



2. SD054 (北から)



3. SD055 ベルト A 断面  
(東から)

図版 12 下崎丸山遺跡



1. SD055 ベルト B 断面  
(東から)

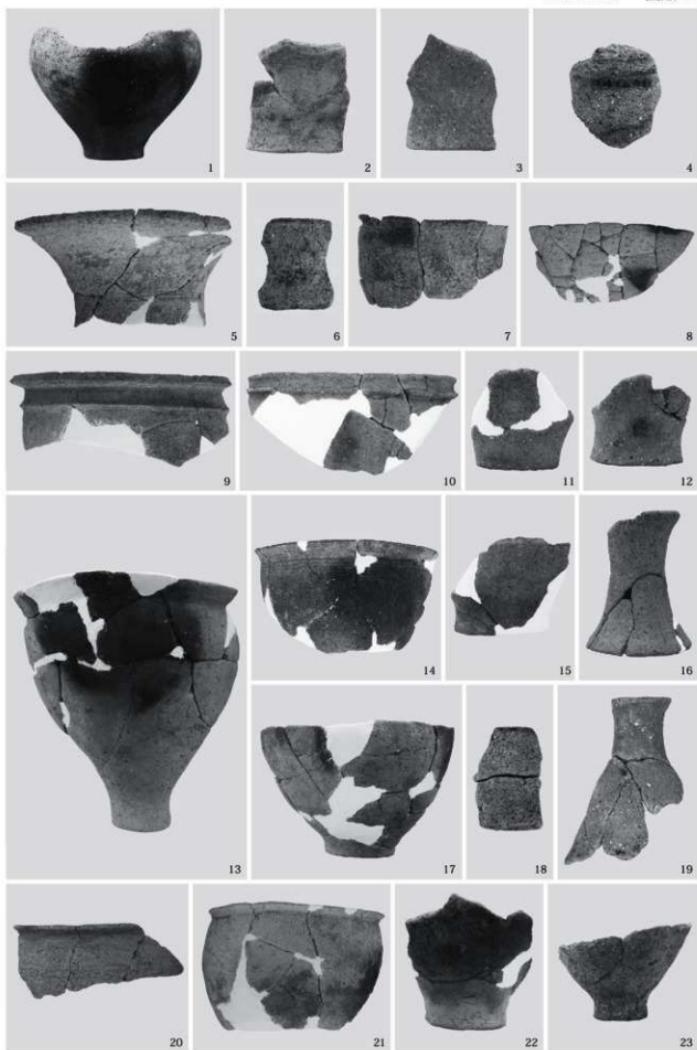


2. SD055 ベルト C 断面  
(東から)



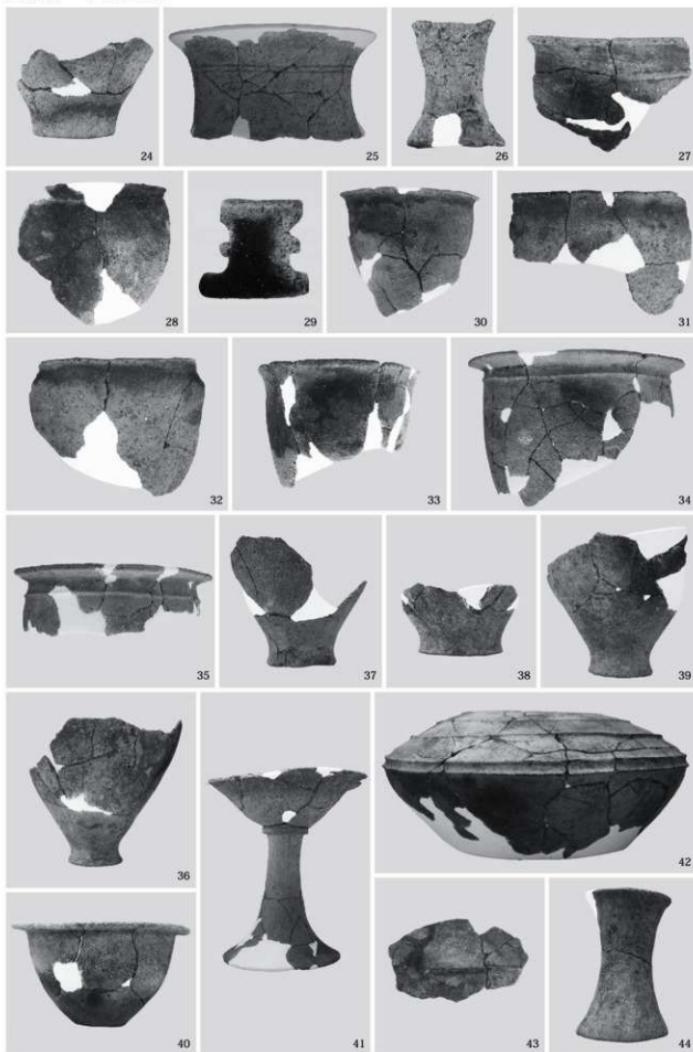
3. SD055 ベルト D 断面  
(東から)

下崎丸山遺跡 図版 13



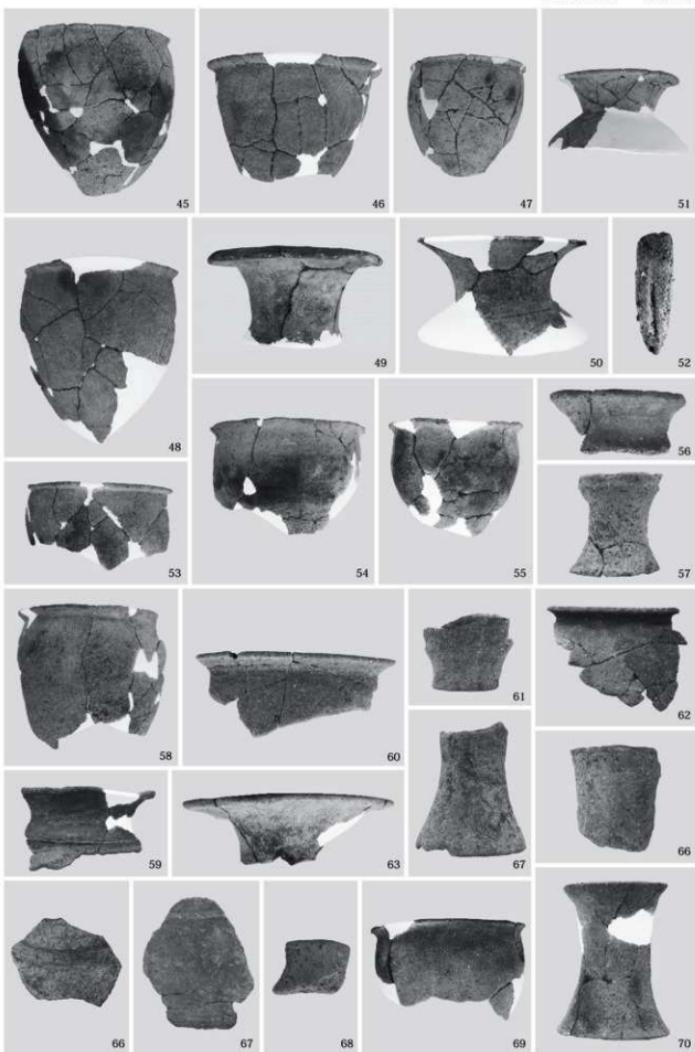
出土遺物 1

図版 14 下崎丸山遺跡



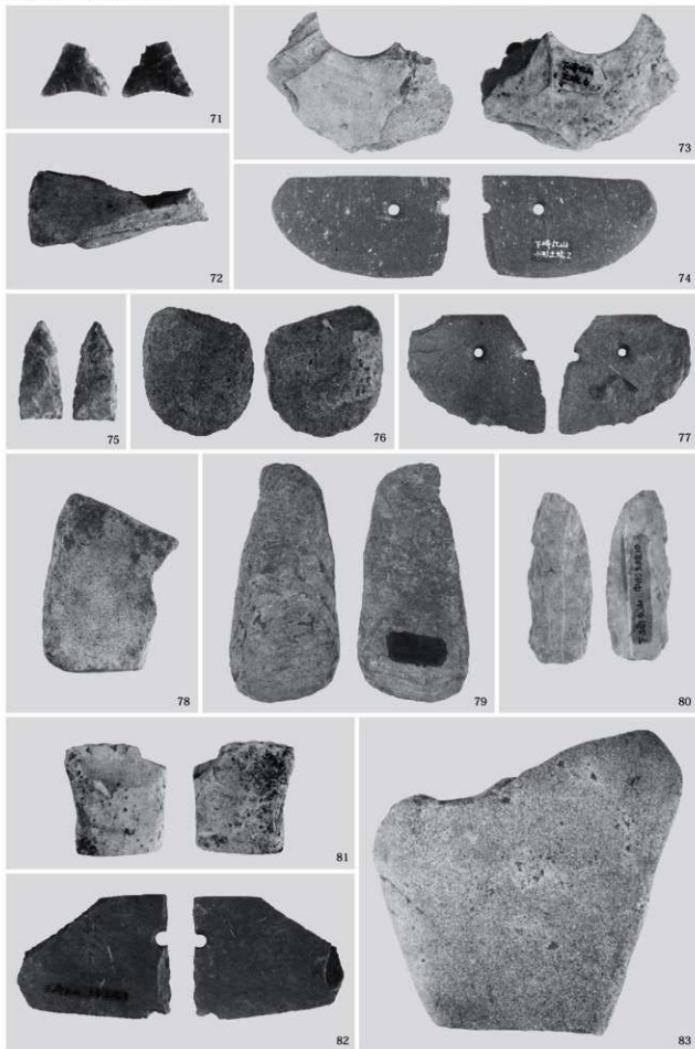
出土遺物 2

下崎丸山遺跡 図版 15

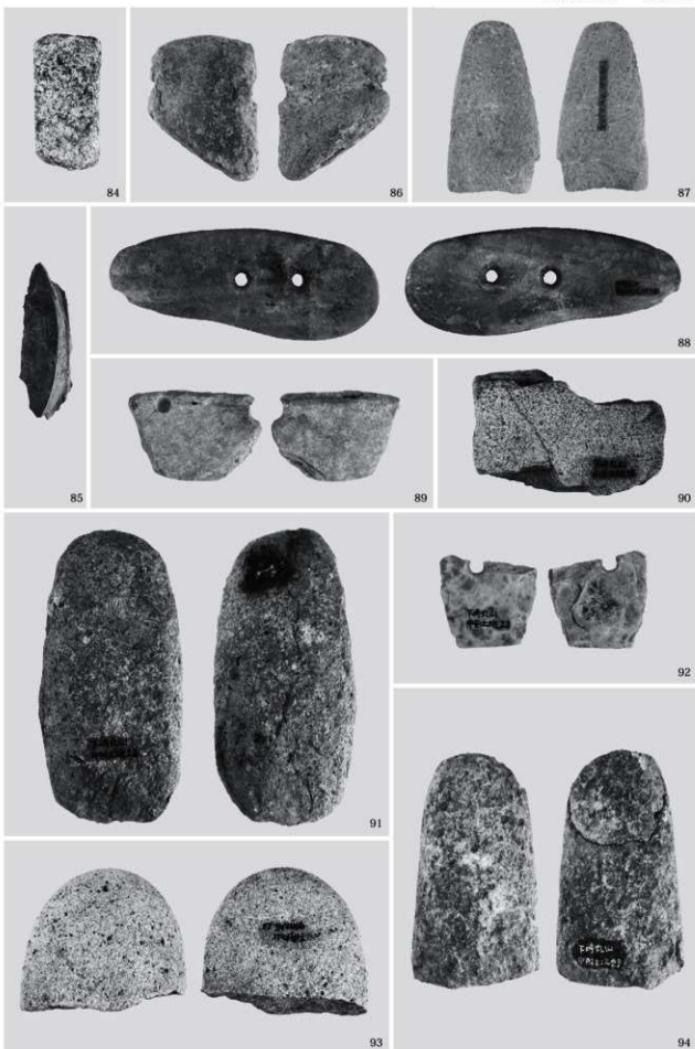


出土遺物 3

图版 16 下崎丸山遺跡

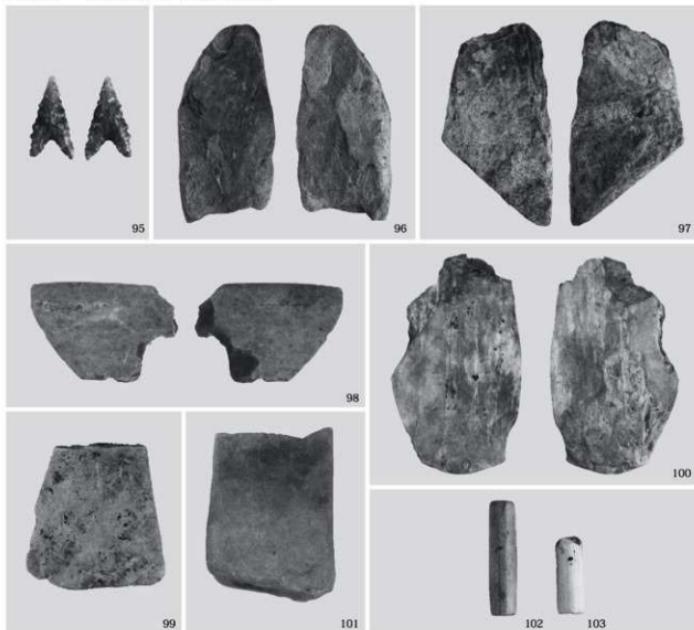


出土遺物 4



出土遺物 5

図版 18 下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡



出土遺物 6



下崎三反間遺跡全景（土が南）

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しもさきまるやまいせき。しもさきさんたんまいせき						
書名	下崎丸山遺跡、下崎三反間遺跡						
副書名	県営ほ場整備事業（入覚地区）関係歴文化財発掘調査報告 4						
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 54 集						
編著者名	山口裕平						
編集機関	行橋市教育委員会						
所在地	〒 824-8601 福岡県行橋市中央一丁目 1 番 1 号 TEL 0930-25-1111 FAX 0930-25-1582						
発行年月日	2014 年 12 月 26 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積
しもさきまるやまいせき 下崎丸山遺跡	福岡県行橋市 大字下崎 452-1 458-1 番地	402133	14125010	33° 43° 25°	130° 55° 39°	2003/10/27 ~ 2004/02/16	2980m <sup>2</sup>
しもさきさんたんまいせき 下崎三反間遺跡	福岡県行橋市 大字下崎 481-1 番地		14125009	33° 43° 27°	130° 55° 40°		850m <sup>2</sup>
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下崎丸山遺跡	集落	弥生時代	竪穴建物、掘立柱建物 土坑、溝、柱穴	弥生土器、石器 石斧、石庖丁、菅玉			
下崎三反間遺跡	集落	不明	土坑、柱穴	なし			
要約		<p>京都平野の北西部、幸ノ山の南東、標高 25m 前後の中位段丘に立地する。</p> <p>下崎丸山遺跡では弥生時代前中期から中期前半頃の集落を確認した。主要遺構に竪穴建物 3 軒、掘立柱建物 5 棟、数条の溝、多数の土坑、柱穴がある。多量の弥生土器を始めとして、土鍬、石器、石斧、石庖丁、石劍、砥石、スクレーパー、菅玉などが出土した。</p> <p>下崎三反間遺跡は削平を受けており明確な遺構を検出できなかったが、下崎丸山遺跡の北限にあたると考えられる。</p>					

2014年(平成 26 年) 12月 26 日 発行

下崎丸山遺跡  
下崎三反間遺跡

行橋市文化財調査報告書 第 5・4 集

著作権所有 福岡県行橋市中央一丁目1番1号  
発 行 行橋市教育委員会

印 刷 福岡県行橋市大橋三丁目1番18号  
はら印刷